会報
特攻
平成26年8月

第101号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階
電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580
編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

靖國神社みたままつり

7月13日から16日まで、恒例の靖國神社「みたままつり」が盛大に斎行され、参詣者は延べ三十数万名に及んだという。

今年第68回目を迎えた「みたままつり」は、今や、都心で催される新暦の一大盆祭りとして定着しているが、この「みたままつり」の最大の特色は、老いも若きも世代を超えて、ここ靖國の宮居に集い、今は護国の神となられた祖父や父、兄弟、戦友たちを偲び、尊い命を捧げて国を守った英霊の御霊を迎えて共に一夜を楽しみ、遺徳を讃え、感謝の誠を捧げるところにある。そして、これは我が国古来の習俗である一大盂蘭盆（うらぼん）の行事でもある。境内一面を照らす大小3万余の献灯や懸け雪洞（ぼりょうりょう）は、精霊の迎え火と送り火になぞらえたものであろうか。「我が国古来の習俗」がそこに表されている。

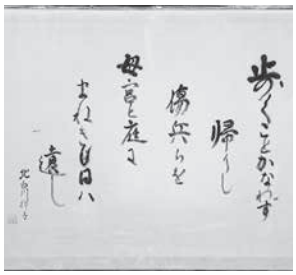
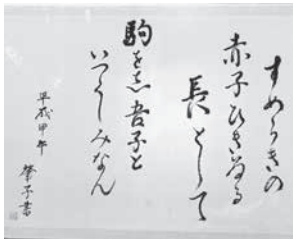
13日は、靖國神社「みたままつり」の前夜祭の日である。

目次

靖國神社みたままつり……1
第60回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して……6
知覧特攻基地戦没者慰霊祭参加所見……8
徳之島と特攻……10
第47回「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」に参列して……13
第23回「昭和の日記念祭・秋田県特別攻撃隊招魂祭」に参列して……15
殉國沖縄學徒顕彰六拾九年祭……17
聖徳太子と十七条憲法―その背景・内政と外政―……21
【学生提言】沖縄の大学生として憲法を考える……25
沖縄県石垣島に第八飛行師団誠第十七戦隊長「伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑」建立される……28
京都霊山護国神社平成26年度「あ、特攻勇士之像」慰霊祭に参列して……32
第47回豫科練戦没者慰霊祭に参列して……33
平成26年度第48回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して……34
当顕彰会会員の資質向上のための施策の紹介①……35
新刊図書紹介
①清武英利著『同期の桜は唄わせない』……38
②吉本貞昭著『知られざる日本国憲法の正体』……40
③丸谷元人著『日本の南洋戦略―南太平洋で始まった新たなる〈戦争〉の行方―』……40
事務局からのお知らせ……43
事務局からの報告等……43

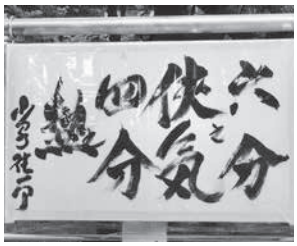
○献燈（懸け雪洞）

・元皇族・皇太后女官長北白川祥子様
「歩くことかなわず帰りし傷兵らを
母宮と庭にまねきし日は遠し」
・元皇族・崇敬者総代　島津　肇子様
永久王御詠
「すめらきの赤子ひきゐる長として
駒をし吾子といつくしみなん」
・靖國神社崇敬奉賛会会長　扇　千景様
「人生は美であり愛である」
・重要無形文化財保持者（人間国宝）
歌舞伎俳優　坂田藤十郎様
「藝」
・英霊にこたえる会会長　中條　高徳様
「八紘一宇」
・元内閣総理大臣　小泉純一郎様
「六分之侠気　四分之熱」
・元台湾総統　李　登　輝様
「實踐躬行」
・スカルノ元インドネシア大統領夫人
デヴィ・スカルノ様
「眞正日本」
・ニュージーランド治安判事　神谷　岱助様
「烈風と怒濤なぎたる南洋は
海空もやして英霊静めぬ」
・講談師　五代目　一龍斎貞花様
「軍神祭る社に勇み駒」
・歌手　ペギー葉山様
「御題　静」
・歌手　大津　美子様
「ここに幸あり」
・女優　浜　木綿子様
「生きて生きて泣いて笑って役者みち」
・横綱　白　鵬様
「夢」

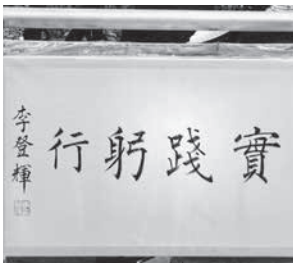



左 島津肇子様・右 北白川祥子様献燈

左 坂田藤十郎氏・右 扇千景会長献燈



左 小泉純一郎元首相・右 中條高徳会長献燈



左 デヴィ・元スカルノ大統領夫人・右 李登輝元台湾総統献燈

この時期、東京では例年、梅雨の終わりも近く、激しい雷雨に襲われることも多いのであるが、今年は、直前に大雨と強風による災害を日本列島各地にもたらして過ぎ去った台風8号のせいで、台風一過、晴天に恵まれるかと思いきや、初日の13日は朝から雲に覆われ、夕方からは雷雨との予報であった。しかし、幸い予報は外れて、薄曇りの蒸し暑い天気であった。だが、日曜日とあって、家族連れも多く、しかも浴衣姿の男女が目立って多かった。矢張り、何処にでもある日本の夏の風景であろうか。

大鳥居から第二鳥居前にある下乗札までの外苑参道両則には、沢山の屋台が連なり、焼き鳥、焼きそば、焼きとうもろこしなどの香ばしい匂いが漂っている。大村益次郎銅像の周りには、盆踊りの舞台が作られ、浴衣姿や法被姿の人々も大勢見受けられた。外国人も多く、中には、日本人にならって、浴衣姿や法被姿の者も見受けられた。

今年は取り分け人出が多く、外苑参道は、通り抜けるのに難渋するほどであった。恐らく10万人を超える人出であろう。

やがて宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞（ぼんぼり）が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。昭和22年7月13日～16日に、神社の正式行事として斎行されてから今年で満67年、68回目を迎えた。

この「みたままつり」の由来や意義については、当顕彰会会報『特攻』第92号に掲載の東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖国神社と日本人』（平成10年8月・PHP新書）や靖國神社社報「やすくに」第624号（平成19年7月1日）掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、今年、遊就館内に掲げら

暑中お見舞い申し上げます

公益財団法人　偕行社

理事長　志摩　篤
副理事長　塩田　章
副理事長　戸塚　新
副理事長　深山明敏
専務理事　白石一郎
事務局長　若木利博

公益財団法人　水交会

会長　藤田幸生
理事長　齊藤　隆
副理事長　田内　浩
専務理事　赤星慶治
事務局長　本多宏隆

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長　島村宜伸
理事長　柚木文夫
専務理事　圓藤春喜
事務局長　岩田司朗

航空自衛隊退職者団体　つばさ会

会長　遠竹郁夫
副会長　杉山　弘
副会長　山本修三
副会長　吉田　正
副会長　藤川壽夫
専務理事　菊川忠継
副専務理事　長島修照

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

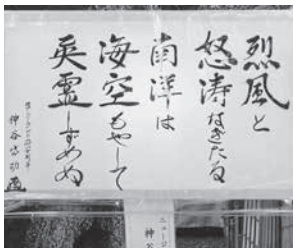
理事長　杉山　蕃
副理事長　藤田幸生
専務理事　衣笠陽雄
事務局長　羽渕徹也

れている「光の祭典『みたままつり』の由来」には、その概要が次のように記載されている。

「『みたままつり』の先駆けとなりましたのが、昭和21年7月14・15両日の2夜にわたり、境内の相撲場で催された、長野県遺族連合会主催による奉納地方民謡・盆踊り大会です。

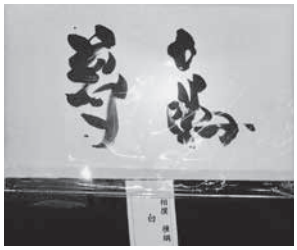
当神社の資料によれば、この催しには3万人を超える参加者で盛況を極め、中には連合軍総司令部バーンズ少佐（14日）、ネルソン少佐（15日）も観覧し、その大会の模様は全国に録音放送された、と記録されています。

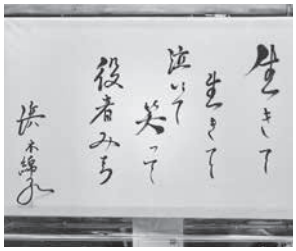
当時、この企画に関わった靖國神社の坂本定夫禰宜（故人）は「亡き人々のみたま（神霊）を祀る日本の古俗を、お盆の季節である7月に新生靖國に復活しては」という構想を描き、大東亜戦争末期に『先祖の話』を書いた民族学者の柳田國男氏を訪ねて相談しました。柳田氏は「みたまの慰霊は極めて大事なことで、世の平和のためにも大切だ。祭りは『華やかで風流』であるべきだ」と賛意を示された。昭和22年7月13日から4日間にわたり第1回の『みたままつり』が催され、以後恒例となりました。



左　講談師　一龍斎貞花氏・右　ニュージーランド治安判事　神谷岱助氏献燈

左　歌手　大津美子氏・右　歌手　ペギー葉山氏献燈





左　横綱　白鵬関・右　女優　浜木綿子氏献燈

現在は各界名士による揮毫の懸雪洞（かけぼんぼり）約300灯をはじめ、ご遺族、戦友、崇敬者等により奉納された大型・小型の提灯約3万灯や全国の有名灯籠が掲げられ、青森ねぶた、地元麹町靖國講・芝濱睦会等による神輿振り、吹奏楽団によるパレードが行われます。外苑の大村益次郎像周辺では連日、盆踊りが、内苑の能楽堂では、日本歌手協会有志や、つのだ・ひろ氏をはじめ有名歌手による奉納公演や日本舞踊、バレエ、奇術等の芸能も催され、その賑々しさは『華やかで風流』な日本一の光の祭典であります」と。

更に靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することとなった。

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早くからの強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日（停戦公表の日、月遅れの盆）に初めて実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたま祭」の延長戦上にあるものと言えよう。

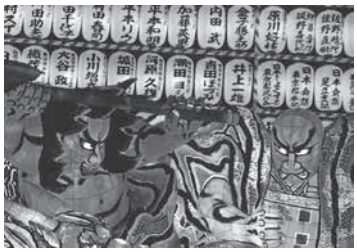
右の閣議決定文には「今次の大戦における全戦没者（軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む）に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・」とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下に合わせて「全国民が一斉に黙祷するよう勧奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われている。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国戦没者之霊」と明記され、それへの拝礼・献花が今日まで続いている。神道の立場から見れば、この標柱は、全戦没者の神霊が宿る神籬（ひもろぎ）の一種（榊や御柱の類）にほかならない、と所教授は指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式」が、これからも共に永く続けられるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このことは、靖國神社に寄せる日本人の誠の心の表れである。

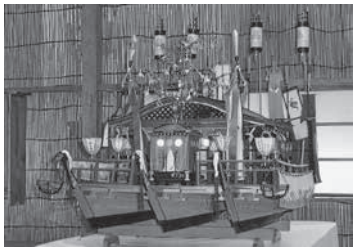
期間中遊就館内は夜9時まで開館されており、折柄特別展「大東亜戦争七十年展Ⅲ」や、過去の、みたままつりに寄せられた「揮毫ぼんぼり展」なども開催され、熱心に鑑賞する参詣者で遅くまで満員の盛況であった。

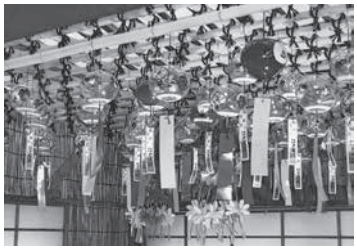
明くる14日（日）は、夕刻6時から第一夜祭が斎行されたが、その日も、東京は朝から曇天ながら猛暑日となった。拝殿から拝する御本殿の偉容は、ライトアップされいよいよ神々しく、御紋章は金色に輝いていた。時折吹き抜ける風は涼しさを運んで心地良かった。徳川康久宮司以下大勢の神官が御奉仕する諸神儀を終えて、参列者一同御本殿に昇殿して拝礼し、第一夜祭は滞りなく終了した。

その後、当日の最大の奉納芸能祭である、恒例の日本歌手協会有志による歌謡特別公演に向かったが、会場の能楽堂前は千名余の観客で溢れていた。

日本歌手協会は、今年設立52周年を迎えたが、設立以来長年にわたり靖國神社みたままつりの奉納歌謡ショーを有志により奉仕してきた。現会長は、昭和20年生まれの歌手田辺靖雄で、懐かしい「新雪」と「夢であいましょう」を歌った。オープニングは、音楽家・合田道人の名司会で、全員が「暁に祈る」を歌い、白根一男が「九段の母」を、民謡の大御所原田直之が、得意の民謡・佐渡おけさ入りの「麦と兵隊」と、東日本大震災の被災地でもよく歌ったという「花は咲く」を声量豊かに歌い上げた。昨年は、伊勢神宮と出雲大社の御遷宮が重なる神の年を寿いで「伊勢音頭」と「出雲安来節」が歌われたが、


青森ねぶた燈籠


宮島管弦船燈籠


江戸風鈴

今年も「神の国にっぽん伊勢、出雲、ご遷宮から幸せへ」と題して、出雲出身の宇山保夫が「出雲路しぐれ雨」を、芸者歌手の下谷二三子が「伊勢音頭」を、それに、今年初登場の変わり種とも言える神職兼歌手の涼恵（すずえ）が「豊葦原（とよあしはら）の瑞穂（みずほ）の国」を歌い上げた。戦後のヒット曲「銀座カンカン娘」と「みずいろの手紙」を、あべ静江が、「リンゴ追分」と「人形の家」を弘田三枝子が、「水色のワルツ」と「この世の花」と「おひまなら来てね」を五月みどりが、「山小舎の灯」と「牧場の朝」をボニージャクスが、それぞれ見事に歌い上げ、司会の合田道人自身も「里の秋（星月夜入り）」を心を込めて歌った。歌手生活61年の超ベテランで、日本歌手協会名誉会長でもあるペギー葉山は、「空の神兵」と「南国土佐を後にして」（この歌は支那戦線に派遣された四国出身兵士を主体とする鯨部隊―第40師団・善通寺編成・兵団文字符「鯨」―でよく歌われていた土佐の「よさこい節」を原曲とするという）を堂々と歌い上げ、更に、最後に歌った「学生時代」は、懐かしい思い出と共に聴衆もこれに唱和した。フィナーレは、２０２０年オリンピック東京開催の成功を祈念して、「東京五輪音頭」を聴衆と共に全員で唱和し、２時間近くに及んだ奉納歌謡ショーは幕を閉じた。英霊もさぞ満足されたことであろう。

五月みどり

原田直之

ペギー葉山

ボニージャックス

下谷二三子

あべ静江

フィナーレ（東京五輪音頭）

神職兼歌手　涼恵

司会兼歌手　合田道人

○鎮霊社例祭（諸霊祭）

靖國神社の拝殿から本殿へ向かう左側の回廊の中程に出入り口の扉があってその外側の旧招魂斎庭に二つの小社がある。向かって右の小社を「元宮」といい、左の小社は「鎮霊社」という。この二社とも大樹の下にひっそりと建っており、よく似た造りの小社であるが、「元宮」は瓦葺きで、「鎮霊社」は銅板葺きである。この旧招魂斎庭に入るには、通常、拝殿の左、回廊に連なる玉垣の奥の門からであるが、門扉が開けられているのは午前9時から午後4時までである。

「鎮霊社」は、「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖國神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為、昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮齋」されており、例祭日は7月13日である。この「鎮霊社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた（昭和21年1月から昭和53年3月死去までの32年間）筑波藤麿氏が、前年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を訪問して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種的迫害等により数百万にも上る非戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆や空襲による死没者を始め、前記のように明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみならず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するため、建立されたのが、この「鎮霊社」であり、靖國神社では「元宮」と共に毎日、神官による祭祀が行われており、その例祭が、趣旨を同じくする「みたままつり」の前夜祭の後の宵祭りとして毎年7月13日の午後8時過ぎに行われている。

それより先、靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れ

た人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった、とのことであり、「鎮霊社」建立以後は、前記のように同社例祭として齋行されている。

鎮霊社

大樹の下、昼なお暗い霊域において、御社の二つの燈明が幽かに揺らぐのみの、暗闇に包まれ、静寂にして幽玄の気に満ちた中での神儀で、篳篥（しちりき）の音と共に、白装束の神官6名によって奉仕され、修祓、降神、献饌、祝詞奏上等が斎行される。参列者は、宮司以下遺族代表他十数名に過ぎない。

なお、鎮霊社に関連して「英霊の志を継承する会」の会長宇井豊氏（陸士59期）は、同会会報『八紘一宇』第13号（平成26年3月15日発行）に「安倍首相の靖國神社と鎮霊社参拝」について、概略次のように述べておられる。「昨年末安倍晋三総理大臣が、靖國神社と共に鎮霊社に参拝戴いたこと、まことに有り難うございました。現在の日本の状況を嘆き悲しみ、また腹立たしく思われておられたであろう英霊は、天皇陛下と共に、必ずや首相の決断を喜ばれ、感謝されていることと思います。

鎮霊社は、昭和四十年に、当時の第五代宮司筑波藤麿様（元皇族・山階宮（やましなのみや）藤麿王）が創建されましたが、一部に反対意見もあり、元宮と共に密かに祀られて来ました。天照大神の大御心であり建国の精神である八紘一宇（世界平和）と、例え敵であっても崇敬する日本古来の美風のもと、世界中のあらゆる戦没者を敵味方なく祀る鎮霊社を建立されたことは、私も理解し、心から賛成であります。

平成五年、第七代大野俊康宮司―「八紘一宇」第12号の拙稿参照―に対して、私は、生き残った吾々の死後を祀る「祖霊社」の創建と、鎮霊社の一般公開を訴え続けてきました。次代湯澤宮司は、毎年七月十三日夜八時三十分から行われる鎮霊社例祭に十名のみの参加を許可され、平成九年から今日まで参加させて戴いております。南部宮司になり、一般にも公開されるようになりました・・・」と。

（飯田　正能記）

第60回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

専務理事　衣笠　陽雄

平成26年5月3日（土）、知覧特攻平和観音堂前で執り行われた、知覧特攻慰霊顕彰会（会長・南九州市長霜出勘平氏）主催の「第60回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」に、当顕彰会代表として参列しましたので、その概要と所見を報告いたします。

一　慰霊祭の概要

今年の慰霊祭は、60回目という節目の年であるためか、慰霊祭参列者は、過去最大の約1200名という多数に上った。特に全国から約300名という多数の御遺族の参列が目立った。

例年どおり、慰霊祭は、鹿屋の海上自衛隊の対潜哨戒機による慰霊飛行、国分駐屯地音楽隊の演奏の後、定刻に開始された。

開式の言葉の後、献茶、参列者一同拝礼、黙祷、読経と続き、霜出知覧特攻慰霊顕彰会長を始めとして来賓等による焼香が行われたが、特に御遺族全員の焼香は、人数の多さで周囲を圧倒していた。読経後、霜出会長が「・・特攻で散華された1036勇士の御霊に対し、衷心より哀悼の誠を捧げる。特攻勇士の御霊たちが、身を擲って国難に殉じたことすら忘れ去られようとしている今日、我が国は経済大国にまで成長し、平和と繁栄が築き上げられてきたが、その幸福を考える時、御霊たちの尊い犠牲と御加護の賜物であることを一日も忘れることはできない。世代は変わろうとも戦没勇士の崇高な精神を顕彰し、史実を正しく後世に伝え、平和の尊さ、命の大切さ、家族と親子の絆を、知覧特攻平和会館を通じ、平和情報の発信基地としての役割を果たしつつ、御霊たちが国の安泰を念じ

つつ散華された御心に応えていくことを誓う。ここ平和会館では、数多くの遺品が展示・保存され、その活用に努めており、全国から訪れる、これからの日本を背負う若い世代の平和学習の場として活用されている。南九州市としても特攻戦没者の慰霊顕彰事業は今後も責務として継承していく所存であるので、御安心を・・・」との追悼の言葉が述べられた。続いて代表者による慰霊の言葉が述べられたが、特に遺族代表の、特攻隊員の兄との最後の別れの場の思い出話には聞く者の涙を誘った。その後少飛会、特操会、偕行会の各代表の言葉があった。

引き続き、詩吟朗詠錦城会による献詠が行われた。今年も散華された３名の特攻隊員の辞世の歌が名調子で披露され、参列者に深い感銘を与えた。

次いで、慰霊電報披露、献花、献奏、南九州市長挨拶、全参列者による慰霊斉唱、閉会の言葉で慰霊祭は滞りなく終了した。

二　参加所見

１　慰霊祭について

戦没者の慰霊祭の主役は、何と言っても、御霊に直接関係する御遺族であるが、今回は全国から約３００名という多くの御遺族が参加された。高齢でこれが最後だからという声も聞こえたが、焼香・献花状況を見ると、それ程超高齢の人ばかりではない。私は世代交代が確実に進んで、特攻隊員の意思が伝承されている証と感じたが、特攻隊員の御遺族は特殊で、隊員の大多数は独身であり、現在既に父母は亡く、兄弟姉妹、叔父叔母等も高齢となって、意思を継ぐ者は、甥、姪が主体となりつつある。しかし、川床氏も言われるように「本当に甥や姪が引き継いでくれるのか、どうか」分からない。また、「遺族とは？」の問題もある。我が顕彰会の慰霊祭においても、「この人が遺族？」というような「遺族」も見られるのである。

いずれ直近の御遺族は姿を消すのであるが、「遺族とは？」等の問題はいずれ顕在化してくるであろう。当然ながら、血縁はなくても、英霊の意思を純粋に引き継ぎ、伝承できる人が中心になってもらいたいと思う。勿論、政治的、あるいは営利等、野心のある者は不適当である。今の慰霊祭では、御遺族がおられるからこそ、精神的に中立でいられるのだと思う。このようなことを考えると、若い人の中から特攻隊の精神や、慰霊祭を引き継いでもらう人材を今から育てておくことが極めて大事だと思う。

２　知覧特攻平和会館について

今回は比較的時間の余裕があったので、展示品をゆっくり見学し、超多忙な語り部の川床氏からも有意義な話を伺うことができた。氏の話では、当日の会館入場者は５千名くらいではないかということであった。連休のせいもあるが、館内は満員御礼状態だし、映像会場なども直ぐに席が埋まる状況であった。ゆっくり見学するには、連休等を外した平日の方がよいとのことであった。

遺書等の展示は以前と変わらないように見えたが、遺品・遺書等の収集については、コピーではなく真筆のものを集めるよう努力しているとのことであり、まだ眠っている遺品がどこかにあるという確信と行動力が、ここの資料収集を積極的にする原動力となっているように思われた。遺族との連絡、面会、手紙のやり取り等により、説明に誤りのないよう、できるだけ正確な史実を把握、確認して語り部の説明内容としているとのことで、そのような努力が、聞く人の心の琴線を揺さぶる内容となっているように感じた。

会館は、所有する遺書等のユネスコ世界記憶遺産登録を推進している。登録されれば、世界に日本人の精神を知らせることができるし、真筆遺書等の長期保存が可能となる利点がある一方、「知覧だけでの登録」には、他の保有する施設等との軋轢を生ずる問題も考えられ、今後登録されたとしても、これらとの調整・説明が必要と思われる。

主催者の追悼の言葉の中で、霜出市長はこの会館を、「全国から訪れる、これからの日本を背負う若い世代の平和学習の場として活用・・・」と述べているが、川床氏は、ここは年間、全国から修学旅行で、約７００校もが訪れているという。その内約３００校が九州の小学校だそうである。高校は、東京の私学が多く、また、学生の質の問題等もあり、平和教育というよりも心の教育面を期待する先生もいるようである。殆どの生徒は真面目で真剣に話を聞いているとのことであった。

高校・中学生の所見を見たが、本当に立派なものを残している。知覧は正に、歴史・精神教育の国民的学校のようであるが、最近、説明は、時間、対象によって歴史背景を削除し、事実だけを述べるという内容に変えているようである。会館の思うようにやれば良いのではないかと思うが、これだけ有名になり、影響力が拡大し、また、市という公共機関が指導しているという誤解等も生じたり、マスコミに注目されたりで、展示要領や語り部の説明も大変だなと感じた。

知覧特攻基地戦没者慰霊祭参加所見

評議員　長瀬　彰孝

平成26年度慰霊祭に参加させていただきました。本年は60回という節目の回数と五月晴れの好天にも恵まれ、参加者が例年より多く、総数約千二百名、うち遺族の方が約三百名で、例年に比較し、それぞれ三百名と、百名の増加となり、極めて盛況でした。

式典は、開始前に海上自衛隊の哨戒機による慰霊飛行が行われた後、式次第どおりに実施されました。

お茶の名産地でもある知覧らしく、献茶から始まり、黙祷・読経・焼香・追悼の言葉と続き、慰霊の言葉を各代表者が述べましたが、中でも遺族代表の言葉が印象的でした。

第53振武隊の特攻隊員として散華された土器手茂生伍長（戦死後少尉特進・少飛14期）の弟さん（当時6歳）が出撃直前に面会した時の話でしたが、「出撃のことはみじんも話さず、『元気で頑張るんだよ』と笑顔で話してくれたことが、今でも瞼に浮かぶ」「直後に沖縄近海での死亡通知が自宅に届き、家族全員で泣いた」と言葉を詰まらせながら語られました。参列者の涙を誘ったのは言うまでもありません。

土器手少尉の遺詠

「国の為なんでおしもう若桜
散ってかひ有る命ちなりせば」

はその後の献詠でも披露されました。

電報披露、献花、献奏、南九州市長挨拶と続き、全員で「加藤隼戦闘隊」と「同期の桜」を斉唱して閉式となりました。

知覧町民挙げての周到な心の籠もった準備と知覧特攻慰霊顕彰会を始め関係者が今まで積み重ねてこられたご努力の結果をつぶさに拝見することができ、多くの教訓を得ることができました。以下所見をまとめます。

一　史跡、遺品の保存整備

関係者のご努力により早くから遺品や遺書の収集を開始されたとのこと、このため多くの資料が展示公開され、これらが定期的に入れ替えられて多くの人々の目に見える状況にあることから、新たに遺品や遺書等の更なる提供や発見に繋がっているようです。また史跡についても、一つ一つは油脂庫、弾薬庫、給水塔など施設の一部にすぎず、かつ、分散して残っているが、それぞれ良く整備されていて、周辺の環境に溶け込んでおり、パンフレットにも散歩コースとして上手に紹介されています。

二　町を挙げての慰霊の取り組み

特攻隊に関わった人々によって始められ、今や町を挙げての行事へと拡大されています。平和観音堂の数次にわたる改築や知覧特攻平和会館の設立、そこでの語り部の方々による分かりやすい説明が、見学者の感動を呼んでおり、今では約六百校の修学旅行等での見学研修が行われていると聞きます。行政の介入により、意地悪な見方をすれば、観光化しているとの見方もありますが、町起こしの一環として行政の力を活用し、町を挙げての取り組みが随所に見られ、盛大で立派な慰霊祭になっているものと思われます。人の力、特に組織力、史跡や遺品といったものがあること、そして財力が、この慰霊祭の力になっているものと思われます。

三　新たな流れ

知覧町では、今年2月に、ユネスコ世界記憶遺産登録申請をされました。日本では、「山本作兵衛炭坑記録画・記録文書」「慶長遣欧使節関係資料」「御堂関白記」の三件が登録されているそうです。知覧町では、世界記憶遺産登録をすることで、戦争の悲惨さを語り継ぎ、「戦争のない平和」「二度と戦争を起こしてはいけない」というメッセージを永久に発信し続けることができる、特攻隊員の遺書・遺品が世界の全人類に認知され、より一層世界恒久平和に貢献できる、「特攻遺書」と「史実」の風化阻止に貢献できるとともに次世代に継承できる、特攻遺書・遺品・資料の収集、保存、管理、デジタル化などを、より一層実施可能にし、永久保存に貢献できる、といったことを狙って申請されたようです。町を挙げての取り組みが、いち早く時流に着目し、更に充実を図りたいとの考えの結果とお聞きしましたが、遺書や遺品は全国各地の記念館や自衛隊の駐屯地で保管されています。特攻隊員に限っては、靖國神社遊就館、海上自衛隊江田島の教育参考館に多く保管されていると聞いています。これらとの兼ね合わせをどう考えるのか、少し気になりました。

式典終了後、知覧特攻平和会館及びミュージアム知覧を見学しました。ユネスコ「登録申請」特別企画展「知覧からの手紙」がミュージアム知覧で開催されていました。義烈空挺隊を輸送した第3独立戦隊（九七重）の久野正信大尉（少尉候補22期）に焦点を当てて、彼の生涯や家族、そして子供に宛てたカタカナの手紙や遺書が詳細に展示されていました。義烈空挺隊の紹介

もかなりのスペースを取って展示されており、習志野空挺団の「空挺館」よりも充実したコーナーになっていました。しかし、場所が少し離れているため、見学者が少なく、残念な思いをしました。

慰霊祭直前の4月30日付け朝日新聞が、排除の理由というシリーズで、この知覧を取り上げ、「美化懸念　知覧展示見直しへ」のタイトルで記事を書いています。サブタイトルは、「特攻伝わらぬ現実」です。これまで平和会館が伝えてきた物語では世界に誤解を与える」「美化ととられぬよう当時の実態がわかる説明が不可欠だ」と、立場の違う人の意見を載せていますが、現状の展示方法に批判的な論調です。そして最後に南九州市長が「若い隊員たちの苦悩や葛藤が伝わるよう展示を見直す」と語ったということで記事を結んでいます。

特攻隊員の慰霊顕彰が目的の当顕彰会の活動が、関係者だけでなく、特に若い人への知識の普及へと発展し、知覧町の活動のように、更に世界の恒久平和に向けた活動へと進化していけば素晴らしいことと思い、今後更に研鑽をしなければならないと深く感じ入りました。

2014年（平成26年）4月30日　朝日新聞　日曜版

特攻 伝わらぬ実像

排除の理由 3

鹿児島県南九州市知覧。第2次大戦末期、飛行機ごと敵艦に突入する「特攻作戦」の基地があった。跡地には知覧特攻平和会館が立ち、若い隊員の遺影と遺書で埋めつくされている。

「自分にはできないことをしたすごい人たち」。福岡市の男子大学生(21)は会館で思いを強めた。映画「永遠の0」がきっかけだった。家族を思い、生還を願う腕利きパイロットが、最後は特攻隊員となる物語だ。「遺書は達筆すぎて、読めたのは『一撃必沈』ぐらい」。でも「国を守ろう」という使命感を感じた。

1975年の開館以来、1700万人が訪れた。特攻関連の映画があると、若い来館者が増えるという。

会館から約1キロ。街の中心部を流れる薩川沿いに、「富屋食堂」と書かれた民間の資料館がある。隊員たちが通った店を移築した。

「全体主義の国家は最後には敗れる」「明日は自由主義者が一人この世から去っていきます」。隊員が憲兵や上官の目を盗み、軍に渡した遺書とは別に、食堂の女将鳥浜トメさんらに託した手紙だ。鳥浜さんの孫で館長の明久さん(53)は「平和会館だけでは伝わらぬ姿を伝えたい」と話す。

■　■

特攻隊員を遺縁に持つ福島昂さん(78)は「記憶が風化し、断片的なエピソードを切り張りした美化が広がっている」と心配する。「原点」と考える遺書は傷みが激しく、2011年、南九州市に、世界記憶遺産への登録を勧めた。市は翌年、準備会を設立。アドバイスを求めた有識者の一人からこう指摘された。

「これまで平和会館が伝えてきた『物語』では、世界に誤解を与える」と。

館内の語り部は、隊員が「命をかけて家族や祖国を守ろうとした」と話す。だが特攻隊員として、九州の別の基地にいた倉掛喜一さん(91)＝福岡市＝は「志願じゃない。強制ですよ」と訴える。隊員に選ばれ、失神する仲間たち。逃げだして憲兵に捕まり、自殺した人もいたという。「逃げても地獄、突っ込んでも地獄。これが特攻ですよ」

有識者も海外から「美化」ととられぬよう、「当時の実態がわかる説明が不可欠だ」と訴え続けた。

市の担当者は「何が『美化』なのかよくわからなかった」と振り返る。来館者は、涙を流して遺書を読んでいる。戦争を繰り返すなというメッセージは、伝わっているではないか――。

市が運営する平和会館は「なるべく解説をしない展示」を心がけてきた。勝ち目はうすいと知っての無謀な作戦と強調すれば、「無意味な死なのか」と遺族や関係者が反発するかもしれない。右翼団体の街宣車が会館前に来て、構成員が軍服のような姿で行進したこともあった。実態に触れることは、極力避けてきた。

市は有識者に「国内で政治問題になる。むずかしい」と答えた。会館の展示にも、記憶遺産の登録申請書にも、有識者の訴えは、反映されなかった。

懸念は当たった。市が今年2月、ユネスコに登録申請すると、中国や韓国が「軍国主義の美化」などと反発した。

英国BBCやエコノミスト誌、豪州のテレビ局なども批判的に報じた。

■　■

知覧を知る右翼団体「全日本愛国者団体会議」の矢野隆三議長(62)は「特攻隊員は究極の愛国者。その精神を海外は理解できない」と、記憶遺産への登録には否定的だ。一方で、「特攻は愚かな大将が始めた、二度と繰り返してはならない作戦。負の側面を隠す方がおかしい」とも話す。

「海外の誤解を解きたい」。南九州市の鞠出勘平市長は、批判も覚悟のうえで、「若い隊員たちの苦悩や葛藤が伝わるよう展示を見直す」と語る。「志願」の強制も含めた当時の実態を知るには、生き残った元隊員への聞きとりが必要だが、高齢化で一刻を争う。

「遺書だけ見ればわかってもらえる、という考えは通じないんですね……」

「みる・きく・はなす」はいま

徳之島と特攻

評議員　新垣　敬輝

東の空がうっすらと白く輝き始めた黎明の中、6機の特攻機がブルンブルン、ブスンブスンというエンジン音と共に海面近くの低空を沖縄目指して飛んできた。

上空では高度を幾層にも分けて敵戦闘機群が特攻機を待ち受けて哨戒飛行を続けている。その中の一群の戦闘機が急降下を始めた。

敵戦闘機群の来襲に気付いた特攻編隊のうちの3機が、抱えていた爆弾を海中に投下して戦闘機本来の身軽な態勢に戻り、空中戦を交えるべく編隊を外れて上昇飛行に移った。僚機が編隊を外れて空中戦に向かったことを確認しつつ、残りの3機はそのまま沖縄を目指して飛行を続けた。

かくしてブルン・ブスンの3機対キーンの十数機との空中戦が始まった。

十数分後、数においてもその性能においても圧倒的優位に立つ敵戦闘機群の前に、6機の特攻機は、全機その姿を海面下に没していた。丁度その頃水平線上に昇り切った太陽と入れ替わるかのようにして。

そんな光景を脳裏に描きながら、鹿児島県徳之島の北端の海に突き出た見晴らし台に立ち、周囲270度に広がる水平線を眺めていた。

鹿児島県徳之島、昭和47年に沖縄が本土復帰を果たす以前、この島は新婚のカップルで賑わった時もあった。

現在では「長寿の島」「出生率上位の島」としてその名を知られる。言わば地上の楽園のようなこの島も、大東亜戦争史にその名が刻まれている。戦艦大和沈没点の基点として。

「――とにかく大和は、昭和二十年四月七日の午後二時二十五分、無数の電霆を海面に走らせ、無数の火竜を飛ばせながら轟然とその姿を海庭に没した。その位置は、北緯三十度四十三分、東経百二十八度四分、九州徳之島の北二百浬（水深四百三十メートル）の場所であった。」

（『小説太平洋戦争』山岡荘八）

その縁からか、徳之島西岸の犬田布岬には「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」が建立されており、毎年四月七日前後に地元伊仙町の主催する慰霊祭が執り行われている。

「――誰もが口には出さないのだが、こんどの戦場が死に場所であることだけは自覚している。その自覚が巨大な柩の隅々までを清掃させてゆくのも哀しい潔癖さのあらわれであろう。誰も命じないのに、ゴシゴシ床をきれいに拭いてゆく。そしてやがて云い合わせたかのように、真新しい下着を取り出して、死装束の着替えにうつる。」

（『小説太平洋戦争』山岡荘八）

これは、出航直前の大和の艦内での下士官と水兵達の姿である。

そして4月7日、午後2時過ぎ、大和の船体の半分以上が海中にあって正に大和沈没直前の様子が以下である。

「――戦い終って、彼らはもはや仕事から解放されてしまっている。ということは取りも直さず死の扉の前に投げ出されているということだ。まだ敵機は無数に頭上で乱舞し、攻撃をくり返している。その下である者は悠々と煙草をふかしている。またある者は応急糧食のビスケットをかじっていた。何という無神経さであろうか。誰の表情にも、平素の訓練と何らの変わったところもない。副長を見かけると不敵な笑みで挙手をする。まことに不思議な精兵たちであった。」

（『慟哭の海』能村次郎）

「――退艦の声は聞かなかったです。もともと海上特攻ですから、艦が沈むからといって退艦の命令が出るはずがない。自分は、総員艦内、という号令以外はないものと思い、最後まで『大和』からはなれない決心でいました。」

（『戦艦大和』児島襄）

これは奇跡的に生還した大和乗組の一人の下士官の証言である。

帝国陸海軍の将兵は、水兵に至るまで見事なまでの戦士であり、日本男児であった。

徳之島は、もう一つ特攻との関わりがある。現在の我々が目にすることのできる特攻機の映像や写真のうち、沖縄周辺の海域に展開している米艦船群に突入する特攻機の姿がある。もちろんこれらは米軍側により撮られたものだ。無数の敵艦からの弾幕を突き抜けて突入してきた特攻機。火を吹きながら、黒煙を上げながら、片翼をもがれて錐揉みしながら落ちる機等々。これら米軍側の撮影の写真や映像に映っている特攻機は、実は「運の良い」特攻機なのだ。重い爆弾を抱えて3時間に近い時間を飛行して沖縄周辺の米艦船群のところまで辿り着けたということをもって「非常に運の良かった」特攻機だと言えるのだ。鹿屋、串良、知覧、万世等九州の特攻基地を飛び立った特攻機は、実はその大半が途中で待ち構える米戦闘機の大群により、その行く手を阻まれていたからである。気象条

件に恵まれるか、たまたまの幸運から米戦闘機群の網の目を潜り抜けることのできた数少ない特攻機が沖縄周辺まで辿り着くことができた。そしてその数少ない特攻機が敵に甚大な損害を与えることができたのだった。

昨平成25年5月、沖縄での海軍戦没者慰霊祭に参列するため、沖縄に向かう飛行機の中で、元特攻隊員だった江名さん（江名武彦海軍少尉）が、以下のことを私に語ってくださった。

「――これまで何度も慰霊祭等のために沖縄に行ったが、その往きの飛行機が奄美大島を過ぎた辺りまで来ると、決まって一瞬グラリと揺れる。飛行機が揺れるのは気流のせいだが、それは特攻で散華した英霊からの合図だと私は思う。」

私達の乗った飛行機が奄美大島を過ぎていよいよ沖縄が近付いたと意識したその時、一瞬グラリときた。それはほんの一瞬のことではあったが、私達は思わず顔を見合わせていた。それは丁度徳之島の上空辺りだった。

飛行機が揺れる原因は気流である。その気流を起こさせたものの「意思」の存在を感じるか否かは現世に生きる我々の魂の感性の問題であろう。

徳之島とはそういう島なのだ。この島の周辺の海底には、愛機と共に沈んだ特攻隊員達の亡骸がそのまま眠っている場所なのだ。

徳之島に行ったら、まず犬田布岬の第二艦隊の戦没将士の慰霊塔の前に頭づき、それからは周囲の海、それはどの方向でも良い、島の至る所で周囲の海に向かって静かに英霊に対して感謝の祈りを捧げる。

私にとって徳之島はそういう場所である。

○アイスバーグ作戦

比島作戦に破れた日本軍が航空戦力の再建と本土及び周辺の防備強化を急いでいる頃、連合国側は、日本本土への最短経路として、沖縄を攻略するアイスバーグ作戦を進めていた。

日本軍の航空基地に囲まれた東支那海に侵入するのであるから、航空機の獲得に十分な手段を講じ、マリアナ基地のB−29等の支援を受けるとともに、米英両国の艦隊からなる空母22隻等の機動部隊に支援された最大規模の統合遠征軍を送ることとした。

慎重を期して事前に本土・南西諸島・台湾の航空基地を攻撃して日本航空部隊を撃破するとともに、約1週間前に慶良間列島を占領して艦隊基地を設定し、また、日本軍を欺瞞するための陽動を実施することとした。

○天号航空作戦計画

比島決戦で海空戦力の大部を喪失した日本としては、前方要地では持久作戦を行ってその間に再建した戦力で本土決戦をするのか、航空戦力の発起が容易な前方地域で最後の決戦をするのかが問題であった。

当初消極的であった海軍は、航空戦力再建の目処が立つとともに、強く前方決戦を主張したが、本土の防衛を無視して全力を前方に注ぎ込むことに徹することもできなかった。また、急遽再建しつつあるとはいえ、量質両面で航空戦力の劣勢は避け難かったので、敵攻略部隊の近接までは極力我が戦力を温存した後、航空及び水上の特攻攻撃で敵を撃破することを主眼とした。攻撃目標を撃破の比較的容易な上陸船団に絞るか、敵戦力の中核である空母機動部隊を狙うかが問題となったが、海軍航空部隊は機動部隊を、陸軍航空部隊は上陸船団を目標とすることとなった。

また、統一運用を容易にするため、陸軍の第六航空軍を聯合艦隊の指揮下に入れることとした。防勢作戦の弱みから、直路沖縄への侵攻の可能性が強いとは思いつつも、台湾あるいは南支沿岸にまず侵攻することも考慮せざるを得なかった。

○天号作戦の発動

連合軍は3月26日慶良間列島に、4月1日沖縄本島に上陸を開始したが、先の九州空襲とその反撃で戦力を消耗していた我が航空部隊の反撃は雨垂れ的で、水上特攻も制され敵は上陸に成功し、北・中飛行場を占領した。4月6日からは天号作戦計画に基づく航空総攻撃が開始された。これは菊水作戦と呼ばれ、陸・海軍特攻機約2千機を含めて第10次まで続行された。

特攻機の攻撃は、敵に大きな脅威を与え、将兵の精神錯乱や戦闘中の指揮官交代まで生じさせたが、連合軍は沖縄基地への防空戦闘機の配置やピケット艦艇等によって窮地を脱した。

日本軍は、関東等からも航空部隊を転用して航空攻撃を続けたが、やがて戦力を消耗し、航空攻撃は逐次減衰した。4月6日には戦艦大和以下の海上特攻が、5月24日には義烈空挺隊による敵飛行場への強硬着陸が行われたが大勢は覆せなかった。

○主要な航空戦の交戦兵力と損害

時　期	名　称	日本側兵力	日本側損害	連合軍兵力	連 合 軍 損 害
3. 18～21	九州攻撃に反撃	第５航空艦隊と第６航空軍 約700機	173機喪失（内特攻115）	機動部隊４群	損傷空母６、駆逐艦１、潜水艦１
3. 23～31	沖縄空襲に反撃	不明確	（特攻機54）	約1,000機	沈没駆逐艦１、損傷空母１、戦艦１、他28
4. 7	沖縄へ海上特攻	戦艦１、軽巡１、駆逐艦８	沈没戦艦１、軽巡１、駆逐艦４	機動部隊４ 約330機	不詳
4. 6～7	菊水１号作戦	394機（特攻215）	178機（特攻162）		沈没駆逐艦他４、損傷空母１、戦艦１、他19
4. 12	菊水２号	345機（特攻103）	114機（特攻69）		沈没駆逐艦１、損傷戦艦２、他11
4. 16	菊水３号	415機（特攻177）	127機（特攻106）		沈没駆逐艦１、損傷空母１、戦艦１、他４
4. 22	菊水４号	271機（特攻70）	39機（特攻32）		沈没掃海艇１、損傷駆逐艦他６
5. 3	菊水５号	300機（特攻136）	65機（特攻61）		沈没駆逐艦３、損傷軽巡他７
5. 11	菊水６号	175機（特攻69）	53機（特攻50）		損傷空母１、駆逐艦２
5. 24～25	菊水７号	361機（特攻107）	41機（特攻32）		損傷駆逐艦７
5. 27～28	菊水８号	208機（特攻51）	46機（特攻26）		沈没駆逐艦１、損傷駆逐艦他５
6. 3～7	菊水９号	245機（特攻22）	18機（特攻５）		損傷駆逐艦１
6. 21～22	菊水10号	255機（特攻67）	53機（特攻28）		損傷水上母艦２、駆逐艦１
4. 1～6. 30	菊水作戦以外の沖縄航空戦	海軍機約6900 陸軍機約2000			沈没駆逐艦５、損傷空母８、戦艦６、巡洋艦２、駆逐艦71、他43

○沖縄作戦関係の特攻―未帰還機

作戦段階別	海　軍　機	陸軍（第６航空軍）	同（第８飛行師団）	合　計
慶良間上陸以前	119機	―――	―――	119機
～本島上陸以前	21機	―――	32機	53機
菊水作戦開始前	40機	17機	35機	92機
４月６日～11日	226機	126機	33機	388機
４月12日～５月３日	303機	239機	47機	589機
～地上戦闘終末	258機	276機	74機	608機
７月～８月	52機	―――	―――	52機
合　計	1019機	661機	221機	1901機

第47回「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」に参列して

会員　高橋　暢

一　慰霊祭の概要

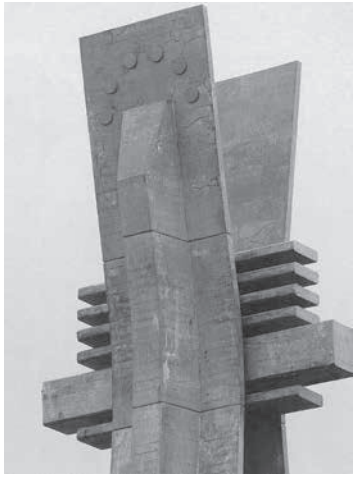
平成26年4月6日（日）、鹿児島県大島郡伊仙町犬田布岬（徳之島）において、第47回「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」が、伊仙町役場の主催で執り行われた。この慰霊祭は、昭和20年4月7日、坊ノ岬沖海戦で戦没した第二艦隊（旗艦・大和）の3721柱の英霊に鎮魂の祈りを捧げるものである。

慰霊祭会場の犬田布岬に聳え立つ、高松宮宣仁親王殿下の御揮毫になる、「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」は、鹿児島県出身の迫水久常氏を建設委員長として全国に寄附を募り、彫刻家中村晋也氏のデザインによって、昭和43年5月23日に建立された。建立当時、戦艦大和は徳之島沖で沈没したと考えられており、景勝地としても有名な、この犬田布岬が建立の地に選ばれた。

戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔

慰霊塔の高さは24m、戦艦大和の艦橋と同じ高さである。戦艦大和の船体の形状をモチーフにした、くの字型の塔を二つ合わせることで合掌の形にしている。

塔の最上部両側面に扇状に配置された六つの丸いボタン状のものは、沈没した戦艦「大和」巡洋艦「矢矧」駆逐艦「朝霜」「磯風」「浜風」「涼月」の6隻を表しており、塔の狭くなった部分で塔を前後に貫く形で配置された六つの棒状のオブジェも、やはり、沈没した6隻を表したものであり、一番大きいものが戦艦大和を表している。



慰霊塔最上部の六つボタンと棒状のオブジェ

戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭は、例年、戦艦大和が沈没した4月7日に合わせて執り行われているが、本年は学校の入学式と重なったため1日早く4月6日に執り行われた。

当日は、実兄が戦艦大和と運命を共にされたという、月本陽蔵氏（80歳・遺族代表）、駆逐艦「初霜」の乗員として、戦艦大和の沈没を目の当たりにしたという元島勇氏（88歳）を含む約160名が参列した。

12時30分、西犬田布婦人会のメンバーによる鎮魂の舞「ああ犬田布岬」が披露され、13時45分に祭典開始の辞となった。一同拝礼の後、国旗・軍艦旗が掲揚された。次いで神事となり、その後、参列者を代表して正友哉氏（93歳）が、「自らを犠牲にした戦没将士の御霊に報いるため、祖国日本を一層発展させるよう努力することを誓います」と祭文奏上を行った。

この日、犬田布岬は風がひどく強かった。空は晴れていたが雲が多く、海原には強風による三角波が目立ち、犬田布岬の岸壁に砕け散る波の飛沫が、時折参列者席まで飛んで来るのが頬に感じられた。ここ何年か、慰霊祭の日には決まって強風となるらしい。

14時30分、黙祷。黙祷の後、遺族を代表して月本陽蔵氏が「この慰霊塔が、多くの尊い命を失って得た日本の平和に感謝し、戦争のない世界平和のシンボルとなることを切望します」と挨拶し、続いて慰霊祭主催町の大久保明町長より「英霊よ、願わくば永遠に祖国日本をお守りください。私達も決意を新たにして、祖国日本を発展させるよう、努力することをお誓い申し上げます」と慰霊の言葉を述べた。

次いで、天城町の森田弘光副町長及び徳之島町の香山泰久副町長の挨拶があり、続いて行われた各代表による玉串奉奠では、当顕彰会を代表して新垣敬輝評議員が玉串を奉げて拝礼した。

その後、祭電奏上、参列者全員による献花、浦安の舞、昇神の儀、国旗・軍艦旗降下が行われ、第47回「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」は無事、閉会となった。

二　所見

「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦

没将士慰霊祭」は、伊仙町の行事として行われており、その斎行は、伊仙町町長を始め、役場職員によって行われている。

慰霊祭の後、伊仙町町長大久保明氏にお話を伺ったところ、慰霊祭を今後とも町の事業として継承していく決意を語ってくださった。大久保町長は、戦後70年を迎える来年には、慰霊塔一帯を更に整備して、慰霊祭をより大規模なものにしたい、加えて、奄美諸島が近く自然遺産に登録される見込みなので、この機会に天城町、徳之島町とも協力し、闘牛など、徳之島の観光資源と併せて、慰霊塔にも観光客を誘致し、更なる顕彰を進めて行きたい、と抱負を語ってくださった。

大久保町長は、気さくな、笑顔の温厚な紳士で、私の拙い質問にも丁寧に答えてくださった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

慰霊祭には、若い職員の姿が目立った。会場の片付けに忙しい彼らに「一番若い人に話を聞きたい」と告げると、皆に推されて、一人の長身の若者が私の前に立った。

島外の大学を卒業後、伊仙町の職員になったという野島幸一郎君は、「慰霊塔のことは知っていたが、慰霊祭のことは町の職員になるまで知らなかった」としながらも、「今はより多くの方々に慰霊祭に参加してほしいという気持ちで携わっています」と語ってくれた。爽やかな笑顔で一礼し、小走りに片付けの輪に戻って行く野島君の後ろ姿を見ながら、私はこの慰霊祭が、伊仙町の人々によって子々孫々にまで継承されて行くであろうことを実感したのである。

「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」から離れた海岸の岩場にひっそりと立つブロンズ像がある。「海炎の像」である。

（編注・「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」及び「海炎の像」については、平成22年8月発行の会報『特攻』第84号に、同慰霊祭関係の記事2編が掲載されているので、併せて参照されたい。）

今回、我々は、鹿児島から搭乗の吉満正広氏（株式会社さくらツアー代表取締役）に、そのブロンズ像の存在を教えていただき、慰霊祭の翌日に改めて犬田布岬を訪れた。岬は、前日とは打って変わって海風が穏やかだった。雲に覆われた海は灰色に沈んでいたが、時折雲間から陽光が射して海原の一部を黄金色に輝かせていた。

慰霊塔から海側に１００ｍ程行った先にブロンズ像は立っている。

右手を空に伸ばし、左手を右手に添え、固く目を閉じ、顔はうつむくように斜め下を向いている。像の背面には、肩から土台にかけて六つの男性の顔が配置されており、あるものは目を閉じ、あるいは半眼となり、苦悶とも悟りともとれる表情を浮かべ、今にも海面に没する寸前のように、あるいはその反対に、今正に海面に浮き上がって来たかのようだ。

うねるような曲線に周囲を囲まれたこの像は、今正に沸き上がらんとしているかのようであった。

後日、この像について、鹿児島県の公益財団法人中村晋也美術館に問い合わせたところ、美術館の野間口泉氏を介して中村晋也氏御本人より回答をいただいた。

お忙しい中、ご対応いただいた野間口泉氏、アトリエで創作中にも拘わらず、お時間を割いていただいた中村晋也氏に、この場をお借りして御礼申し上げたい。

岩場に立つこの像は、「海炎の像」である。英霊の魂が海中から現れる様子を表現したこの海炎の像は、昭和43年、戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔と同時に建立された。

海炎の像の背後にある六つのマスクは、戦艦大和等6隻の戦没艦の周囲を取り巻くように立ち昇る曲線は、戦没戦士の魂の炎をそれぞれ表している。

慰霊塔から像までの距離は、戦艦大和の艦橋から艦首までの距離と同じ１２０ｍであり、塔と像との位置関係を見ることによって、戦艦大和のスケールがイメージできるようになっている。

この像を造るに当たり、中村晋也氏は、一人この岬に佇み、海から英霊の魂が上がってくる様を思い描いたという。そして、海炎の像を本尊、慰霊塔を拝礼場とするコンセプトで、二つを造り上げたのである。つまり、犬田布岬は、海炎の像と慰霊塔によって形成された、戦艦大和の原寸大の巨大な礼拝場なのである。

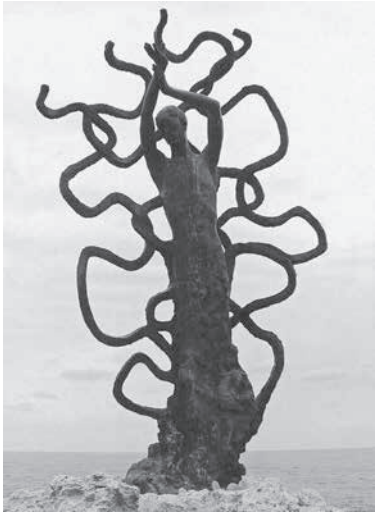
現地で撮影した写真を、改めて見てみると、慰霊塔の中央に、海炎の像が見えるのが分かる。

像の立つ場所は、慰霊塔が立つ地盤より低くなっており、像の土台となる岩場が見えにくく、その為、恰も像が海面から直接出現しているかのようである。これこそ47年前、中村氏がこの岬に佇み、思い描いた光景そのものではなかろうか。

海炎の像と戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔が織りなすスケールは、正に史上最大の戦艦大和に相応しい、壮大なものであった。

第23回「昭和の日記念祭・秋田県特別攻撃隊招魂祭」に参列して

会員　高橋　暢



海炎の像

海炎の像背面と慰霊塔

慰霊塔側から見える海炎の像

一　慰霊祭の概要

平成26年4月29日（火）、麗らかな春の日の正午より、秋田県秋田市川尻の総社神社において、「昭和の日記念祭・秋田県特別攻撃隊招魂祭」が、同招魂祭実行委員会の主催で行われ、来賓の荒木和弘氏、上島嘉朗氏、葛城奈海氏、旧軍関係者、現役・退役自衛官、民間有志など約50名が参列した。

この招魂祭は、平成4年4月29日に「特別攻撃隊忠魂之碑」の建立除幕式と共に始まり、今年で23回目となる。「特別攻撃隊忠魂之碑」は、秋田県出身の陸海軍特別攻撃隊戦没者56名を祀るもので、桝谷健夫氏（ツバサ広業前社長・秋田市八橋）が私財を投じて「大東亜戦争の意義の碑」と共に建立したものである。その後、平成9年4月29日には、特攻隊戦没者56名の写真、写経、遺書、戦闘写真等を収めた「特攻隊写真碑」が、同じく桝谷健夫氏によって建立され、以来、招魂祭は正に、英霊達の目前で執り行われている。

正午の開式の辞に続いて、一同が、昭和天皇武蔵野御陵を遥拝し、次いで雅楽器の伴奏によって国歌を斉唱した。澄み切った青空の下、雅楽の神秘的で荘厳な音色が境内に響き渡った。

続いて、「国の鎮め」のラッパ吹奏の下に黙祷を行い、次いで神事が斎行されたが、雅楽の吹奏により神前に神楽舞が奉納された。

続いて、追悼文奉読では、御自身も海軍航空機搭乗員であられた藤本光男氏（86歳）が、御自身の予科練生活や小説『永遠の0（ゼロ）』の内容に触れながら当時の航空機搭乗員、特攻隊員の心情を振り返りつつ、英霊達を追悼した。

そして、秋田県出身の特攻隊戦没者56名の英霊の御芳名が、司会の藤原信悦氏により神前に奉読された。

秋田県出身陸海軍特別攻撃隊戦没者56名（階級は二階級特進後）

大日本帝国陸軍

・沖縄特攻義烈空挺隊（1名）

渡辺和夫中佐

・飛行特別攻撃隊（14名）

伊藤實中佐・富永義夫中佐・金丸亨少佐・松井浩少佐・杉田繁大尉・戸澤吾郎大尉・奈良又男大尉・三浦廣司郎大尉・渡辺国臣大尉・伊藤甲子郎少尉・小野寅蔵少尉・坂本清少尉・登藤文六少尉・播磨勝三郎軍曹

・レイテ島降下高千穂空挺団（9名）

阿部庄太郎少尉・菊地松治少尉・黒澤勇太郎少尉・小野寺正二准尉・菅原雄次准尉・菅原喜代志准尉・細川正太郎准尉・武石鉄三郎准尉・高橋常三郎准尉

・海上挺進隊（4名）

小笠原七郎少尉・佐々木芳助少尉・米山佐市少尉・倉田三郎少尉

大日本帝国海軍

・神風特別攻撃隊（17名）

高橋恒夫少佐・小野寺朝男大尉・笹本洵平大尉・高久健一大尉・栗沢栄吉少尉・桑野正昭少尉・工藤丑雄少尉・小玉酉治少尉・小松文雄少尉・酒樹正少尉・信太廣蔵少尉・菅原善三少尉・高橋忠少尉・富樫惣吉少尉・奈良営太郎少尉・山本英司少尉・和田可臣飛曹

・神潮特別攻撃隊・回天（1名）

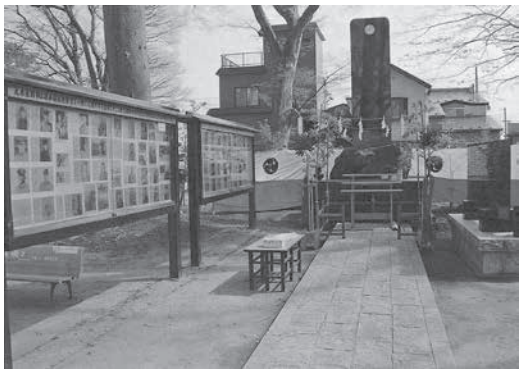
関豊興大尉

・桜花特別攻撃隊（10名）

植村正次郎中尉・木村信一中尉・石橋憲司少尉・大日向三郎少尉・後藤志郎少尉・佐藤俊夫少尉・堀江真少尉・田口末吉飛曹長・中野堅之助飛曹長・松枝近金作飛曹長

続いて、招魂祭実行委員長山本高敬氏が、大西瀧治郎海軍中将の遺書を朗読し、玉串奉奠では、来賓の3名、藤本氏、空挺同志会一同、山本氏らが玉串を捧げて拝礼した。玉串拝礼の間、地元有志の「日吉の森ハーモニー」皆さん3名のハーモニカによる「同期の桜」が、絶え間なく演奏された。

神事終了後は、ツバサ広業社長桝谷政雄氏の御礼の辞、参列者全員による聖寿万歳三唱と続き、最後に雅楽の伴奏により、全員で「海ゆかば」を斉唱して閉式となった。



特別攻撃隊忠魂之碑

特攻戦没者の刻銘

二　所見

「特別攻撃隊忠魂之碑」、「大東亜戦争の意義の碑」、「特攻隊写真碑」を自ら建立し、平成4年以来、秋田県特別攻撃隊招魂祭を執り行ってきた桝谷健夫氏は、御自身も元海軍特攻隊員であり、戦後大変な苦労をして事業を起こしながら、多額の私財を投じて慰霊活動を継続されている方である。

神前　神楽舞奉納

桝谷氏は北海道生まれ、幼少の頃、父親の実家のある秋田市に移り住んだ。昭和20年3月、海軍工作学校沼津校を卒業し、長崎県大村湾川棚基地第三特攻戦隊川棚突撃隊に配属された。

当時、川棚基地には、海上特攻「震洋」、潜水特攻「回天」、「伏龍」の各部隊が駐屯しており、桝谷氏も特攻部隊を見送ったという。

同基地において終戦となり、秋田に戻って広告会社「ツバサ広業」を創業し、昭和50年代に、詳細な調査に基づく「秋田県戦没者芳名録」（全10巻）を編纂し、1万5千冊を県内の遺族に寄贈した。この芳名録は計画から配布完了まで10年を要し、費用総額は2億5千万円を超えたという。桝谷氏は、これを「生き残った人間の義務」として、全て自費で行った。

今年で23回目となる招魂祭には、多くの著名人も参列し、招魂祭の後には、近くの会場で講演会やシンポジウムを行っている。

体調不良ということで、今年の招魂祭に、桝谷氏はお見えにならなかったが、御子息であり、現ツバサ広業社長の桝谷政雄氏が参列して御礼の辞を述べられた。桝谷健夫氏の意思が、しっかりと御子息に受け継がれている印象を受けた。

招魂祭の後、司会進行の藤原信悦氏にお話を伺った。第3回から司会として携わっておられるという藤原氏によれは、ここ5年程で参列者の世代交代が顕著となり、現在は多くの若い世代が招魂祭の運営に携わり、招魂祭のホームページを作るなどしているとのことである。

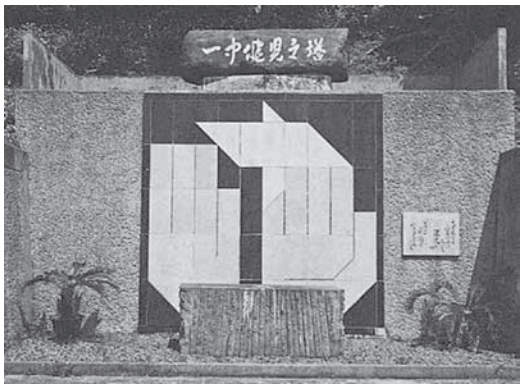
さぞ招魂祭の運営等に力を注いでおられるのだろうと思いきや、意外にもそのようなことは一切していないのだそうである。「宣伝するつもりは一切ありません。本当に慰霊顕彰の気持ちを持った人でなければ、形だけしてもらっても意味がありません。例え二、三名になろうとも、真の志のあるものだけで招魂祭を続けていけばよいのです。これは、桝谷さんがずっと言っていたことです」と、藤原氏は言う。

桝谷健夫氏の志が受け継がれたこの招魂祭を通じ、秋田県出身の特攻戦没の英霊や、桝谷氏ら元特攻隊員達の志が、末永く語り継がれて行くことだろうと思う。

殉國沖縄學徒顯彰六拾九年祭

6月23日は、沖縄「慰霊の日」である。沖縄戦最後の激戦地となった本島南部糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園内にある「国立沖縄戦没者墓苑」では、沖縄県の主催による「沖縄全戦没者追悼式」が、安倍首相、仲井真弘多知事や遺族ら約4600名が参列し、犠牲者の冥福を祈った。安倍首相と仲井真知事は、今も続く米軍基地負担の軽減に全力で取り組む決意を揃って表明した。式典には、キャロライン・ケネディ駐日米大使も初めて参列し、正午から全員で約1分間の黙祷を捧げた。仲井真知事は、平和宣言の中で、懸案となっている米軍普天間飛行場（宜野湾市）の移設問題について「機能を削減し、県外への移設を始めとするあらゆる方策を講じて、喫緊の課題を解決するために、全力を注がなければならない」と訴えた。過去3年間の平和宣言では「県外移設を求める」と主張してきたが、昨年12月、日米両政府が合意した移設先の名護市辺野古沿岸部の埋め立てを自ら承認したことを踏まえ、「県外」にこだわらない表現にした。これに対し、安倍首相は挨拶の中で、「米軍基地の負担を能う限り軽くするために、『できることは全て行う』との姿勢で、全力を尽くしていく」と応じた。

沖縄戦は、69年前のこの日、組織的な戦闘が終わった（昭和20年6月23日未明、摩文仁の丘の地下洞窟にあった司令部を出た軍司令官牛島満大将と参謀長長勇中将のお二人は、南面して座し、古武士の型にならい、それぞれの愛刀をもって、従容として割腹自決された。介錯は、剣道5段の坂口勝大尉が見事に務め果たし、予て用意の墓場に遺体を埋め、そこに小さな墓標を立てた。時に午前4時30分であったという。戦後、昭和27年6月、土建業の巽組と沖縄県遺族会連合会等の手によって摩文仁の丘の頂上に慰霊碑「黎明之塔」が建立された。牛島大将の辞世の歌「矢弾尽キ天地染メテ散ルトテモ　魂還リ魂還リ皇国護ラン」）が、県によると、沖縄戦の戦没者は日米合わせて約20万人と推計され、このうち約9万4000人が軍人・軍属以外の県民であったという。平和祈念公園内の「平和の礎」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年新たに54柱が追加され、総数24万1281柱となった。この刻銘について、沖縄県出身者については、昭和6年の満洲事変以降に、県内外で、戦争により亡くなった全ての方々の名前を刻銘するということである。したがって、沖縄本島とその周辺における陸海軍の戦死者及び沖縄作戦中の特攻戦死者、沖縄県の職員や一般住民の戦没者のみならず、満洲事変以降他の戦線で戦没した沖縄県出身の全戦没者を含めた数ということであって、この数が沖縄戦による犠牲者数と誤り伝えられることも多い。しかも、マスコミが報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例が殆どである。



一中健児之塔（県立一中の教師、生徒戦没者の慰霊碑）

ひめゆりの塔（沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校の教師、生徒戦没者の慰霊碑）

戦後69年を経た今日なお現地沖縄の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、就中、各戦没従軍学徒の碑（沖縄師範健児之塔、一中健児之塔、二中健児之塔、三中学徒之碑、和魂の塔、農林健児之塔、翔洋碑、沖縄工業健児之塔、開南健児之塔、ひめゆりの塔、白梅之塔、南燈慰霊之塔、梯梧之塔、ずいせんの塔、積徳高等女学校慰霊之碑等）でも行われているが、中央における沖縄戦戦没者慰霊行事が、唯一、靖國神社における本顯彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスコミがこれを報道することもない。

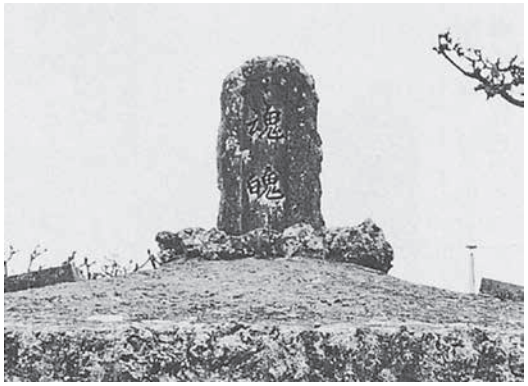
沖縄戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して

「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となって軍事訓練につき、20年3月には沖縄師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学校、同工業・農林・水産、市立商業学校、私立開南中学校の9校から1880余名が「鉄血勤皇隊」及び通信隊に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬首里城の急を救おうとして

黎明之塔（牛島満大将・長勇中将の慰霊碑）

「学徒斬込隊」が志願編成され、50余名が一体となって敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。

女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その外、県立第二高等女学校の「白梅学徒隊」、同第三高等女学校の「名護蘭学徒隊」、同首里高等女学校の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高等女学校の「梯梧学徒隊」、私立積徳高等女学校の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数約540余名に及び、各戦線において、



魂魄之塔（沖縄戦戦没者の納骨塔）

弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴ったが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員も解除されたので、伊原の洞窟にあった第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替え、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあった。その他戦死した女学生の数は動員数の45％240数名に及び、男子部の44％830余名と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

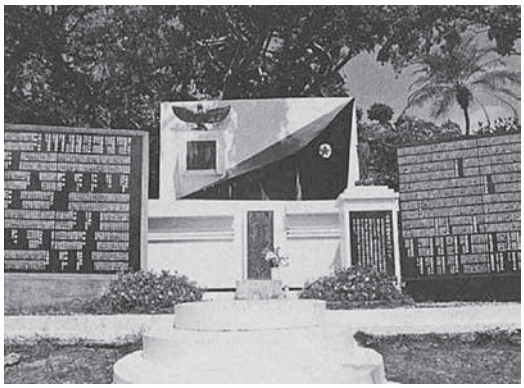
沖縄本島南部摩文仁地区に近い米須地区も最大の激戦地であったが、その糸満市米須に「魂魄之塔」という沖縄

金城和信村長の銅像

戦戦没者の遺骨を納めた慰霊の塔がある。合祀者数3万5千余柱、建立は昭和21年2月で、慰霊碑としては最も早い。碑文によると、その地は、戦後、真和志村（現在は那覇市の一部）村民が、米軍によって収容・移住を許された所で、村民及び地域住民の協力により、当時まだ道路や畑の中など周辺至る所に散乱していた遺骨を集めて祀った墓所で、3万5千余柱という、沖縄で一番多くの戦没者の遺骨を納めた無名戦士の墓であったが、昭和54年2月に摩文仁の丘に国立戦没者墓苑が完成し、遺骨は同墓苑納骨堂に分骨して安置されているとのことである。この塔の建立に当たっては、当時真和志村村長であった金城和信氏が中心となって米軍と交渉し、夫人や村民の協力を得て、遺骨の収集、慰霊碑の建立に当たられた。氏は戦前、小学校の校長をしておられ、沖縄戦では沢山の教え子が戦死し、自身の二人の娘さんも、ひめゆり学徒隊として戦死されており、こうした戦没者を供養したいという強い思いから、その後も戦没者慰霊のリーダーとして、「ひめゆりの塔」「健児之塔」などを次々に建立され、沖縄県遺族連合会の会長も務められた。昭和53年に金城和信氏が亡くなられてからは、その功績を讃え、「魂魄之塔」と

向かい合うように銅像が立てられた。その父親の御意志を受け継ぎ、「殉國沖縄學徒顕彰祭」を取り仕切り、靖國神社で毎年斎行して来られたのが元国士館大学教授金城和彦先生であるが、その先生も今年2月19日、惜しくも逝去された。

既に平成22年、金城先生御夫妻が共に体調を崩され、事務を継続することができなくなったため、その斎行が危ぶまれていたが、先生の御意志を受け継ぐ若い学生達の熱意と努力によって同年6月23日、ようやく斎行に漕ぎ着けることができ、翌23年からは全日本学生文化会議の支援を得て、学生実行委員会（委員長上野竜太朗君）が主催して斎行することとなった。


小桜の塔（対馬丸犠牲者の慰霊碑）

一昨年は、沖縄（琉球）の本土復帰（昭和47年5月15日）から40周年、日中国交正常化宣言（昭和47年9月29日）から40年の節目の年であった。また、天皇、皇后両陛下には、「第32回全国豊かな海づくり大会」に御臨席のため、11月17日～20日、沖縄県を御訪問になり、摩文仁の丘の沖縄平和祈念堂を御拝礼になり、元白梅学徒隊（県立第二高等女学校）の方々と懇談をされ、国立戦没者墓苑で供花をされた。大会御臨席のほか、沖縄本島各地を御訪問の後、20日には、初めて久米島を御訪問になられた。沖縄県民は、両陛下をお迎えして、7千名の提灯パレードなどで大歓迎の意を表した。

今年もまた、天皇、皇后両陛下は、去る6月26日から1泊2日の沖縄戦没者慰霊の旅に立たれ、26日の午後には糸満市摩文仁の丘の国立戦没者墓苑を拝礼された。両陛下の沖縄御訪問は、皇太子、同妃両殿下時代を通じて、10回目である。そして、今年は、大東亜戦争末期の昭和19年8月22日、沖縄からの学童疎開船・対馬丸が、屋久島の南、吐噶喇列島（トカラ）・悪石島（あくせきじま）沖で米潜水艦の魚雷攻撃を受けて轟沈し、いたいけな学童780名と付添いの教師、老人など合計1484名が犠牲となってより、70周年の節目の年に当たるところから、翌27日午前には、長年大御心を寄せられていた、那覇市若狭の、対馬丸犠牲者の慰霊碑「小桜（こざくら）の塔」を拝礼され、白菊の花を供えられた。続いて「対馬丸記念館」を御訪問、学童達の遺品などを御覧になった後、同館において、15名の生存者や遺族らと御面会になられ、約30分を掛けて一人一人から話をお聞きになられた。犠牲者には、当時小学生であられた両陛下と同い年の子も多かったためか、1997年（平成9年）12月、対馬丸の船体が鹿児島県悪石島沖の海底で確認されて以来、殊の外痛惜の想いを寄せて来られた。天皇陛下はこれまでも、「沖縄の災難を日本人全体で分かち合うことが大切」と述べてこられた。今回の沖縄慰霊御訪問は「苦難を分かち合う」ことの大切さを御自らお示しになられた旅となった。

小桜の塔に献花される天皇、皇后両陛下

対馬丸記念館で遺族や生存者らと話をされる天皇、皇后両陛下

また昨年は、5月19日に、沖縄県宜野湾市民会館において、民間主催の「沖縄県祖国復帰41周年記念大会」が、約1300名の市民の参加を得て盛大に開催され、祖国復帰を祝う「日の丸パレード」も実施された。これまで長い間、左翼活動家達によって、5月15日は、米軍基地を押し付けられた「屈辱の日」と位置付けられ、反米、反自衛隊、反基地闘争の象徴的記念日となっていたが、一昨年初めて40年ぶりに本来の姿である、沖縄の祖国復帰を祝う県民大会として開催することができたのである。そして、それらの諸行事に学生達は積極的に参加し、現地学生を中心とする県民と共に活動した。

今年は取り分け、安倍首相の主導の下、集団的自衛権の限定容認、安全保

障政策の転換を図り、尖閣諸島の領有権を始め、海洋進出・支配権拡大の野望を図る中国への対応、沖縄防衛のための日米安保新体制の確立等、緊急に対応すべき難問が山積し、日本は外交・防衛態勢強化の正念場に立たされている。

このような内外情勢多難の中での顕彰祭斎行であったが、一昨年から第一部と第二部に分けて実施されることとなり、今年も第一部は「殉國沖縄學徒をお偲びする集い」として、靖國神社参集殿2階で実施され、従前の祭典は第二部として、神社拝殿で斎行された。第一部、第2部とも、昨年とほぼ同じ約70名の参加者があった。

そして、その企画・運営もほとんど全部、若い学生諸君によって実施されており、大変頼もしく感じられた。

今日、沖縄戦は多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下にあって、将兵はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身命を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

本顕彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖縄殉国学徒の慰霊顕彰祭を斎行して今年第58回目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しており、特に平成22年以来、前記のような事情によって参列者が減少した。それが一昨年来、倍増するようになったことは、誠に喜ばしい。しかも、その内の約半数以上は、学生や若者など金城先生の志を継ぐ者であることは頼もしい限りである。

第一部の「殉國沖縄學徒をお偲びする集い」では、上野竜太朗実行委員長の挨拶に続いて、御来賓の小田村四郎元拓殖大学総長が挨拶をされたが、その中で、沖縄戦が本土防衛と終戦処理に果たした意義等を強調された。同じく御来賓の長谷川博氏は、金城和彦先生の教え子で、高校時代柔道部顧問をしておられた先生から親しく指導を受けた思い出話等を披露され、先生の御意志を、教え子として生ある限り継承して行きたい、と述べられた。

続いて、沖縄慰霊碑巡拝等に参加した立教大学3年の八木澤桃子さんの報告、感想や決意の披瀝等があって、第一部は非常に感銘深く傾聴した。

第二部の式典は、靖國神社拝殿において斎行され、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上等の神儀、御遺文奉読、御遺詠奉誦と進み、学生代表により感銘深い祭文が奏上された。

次いで、参列者から奉呈された献歌奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のうちに、参列者全員、御本殿に昇殿し、玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく終了した。その後、遊就館旧正面玄関前で、全員の記念撮影を行い、再会を誓って解散した。

（飯田正能記）

◇　◇　◇

【御遺文】

○小渡（おと）　壮一（そういち）命　沖縄県立第一中学校四年生・鉄血勤皇隊球（たま）九七〇〇部隊野戦重砲隊、真壁にて戦死、　当時十七歳

御両親様

どうか健在であって下さい。私も今度鉄血勤皇隊に入り、郷土沖縄に上陸した敵と戦ひます。しっかりやります。御安心下さい。萬一私が戦死した時は、よくやって呉れたと思はれて、決して嘆く様なことはしないで下さい。

最後に御両親様の御健康と御発展をお祈り致します。さやうなら。

身はたとひこの沖縄に果つるとも
七度生まれて敵亡さん

四年　小渡　壮一

【御遺詠】

○小渡（おと）　壮一（そういち）命　沖縄県立第一中学校四年生・鉄血勤皇隊球（たま）九七〇〇部隊野戦重砲隊、真壁にて戦死、　当時十七歳

身はたとひこの沖縄に果つるとも
七度生まれて敵亡さん

○安谷屋盛治（あだにやもりはる）命　沖縄県立第一中学校三年生・鉄血勤皇隊球九七〇〇部隊野戦重砲隊、真壁にて戦死、　当時十六歳

大君の御旗の下に死してこそ
人と生まれしかひはありけり

君のため何かをしまむ若櫻
散って甲斐ある命なりせば

聖徳太子と十七条憲法
―その背景・内政と外交―

評議員　飯田　正能

一　特攻平和観音像と聖徳太子

大方ご承知のとおり、世田谷山観音寺境内の特攻観音堂に安置されている二体の「特攻平和観音像」は、その前庭の蓮池の中に立つ夢違観音像とともに、聖徳太子によって創建され、現存する我が国最古の寺院である国宝法隆寺東院の夢殿に安置されている秘仏・通称「夢違観音像」を模したものであると言われている（正確には、夢殿、即ち法隆寺東院の金堂は、聖徳太子の斑鳩宮（いかるがのみや）跡に、行信僧都が西暦７３９年に建立した八角円堂で、太子の夢に金人が現れて教示したという伝説に基づき夢殿と呼ばれる。太子の等身の像と伝えられる本尊観世音菩薩―救世（くぜ）観世音菩薩と称する―の立像は、飛鳥時代彫刻の代表作である。なお、法隆寺は斑鳩寺とも言い、６０５年、聖徳太子が斑鳩宮に遷居し、その付属仏堂として創建されたのに始まり、６４３年、上宮王家の絶滅後一時衰頽したが、６８０年頃より隆昌に向かい、次第に主要堂塔が完備した。７３９年、行信僧都が東院伽藍を造営し、８世紀後半より七大寺の一つとなった。法隆寺には各時代の建造物が多数存在するが、金堂等の主要な堂塔の建立年代については、日本書紀等に、６７０年に罹災の記事があるところより、19世紀末以来再建非再建論争が展開され、未だ明確な結論を得ていないが、斑鳩宮付属仏堂は間もなく現若草寺跡地に発展したが、それが６４３年頃焼失したため、現西院伽藍の建立をしたと推定される。現金堂は細部にシナの北魏後期～東西魏頃（５００～５５０年）の様式を有し、６４５年頃造営され、五重塔・中門は７１５年頃の造立らしいが、いずれも飛鳥様式を伝え、世界最古の木造建築で、法隆寺式伽藍配置として著名である。また、金堂釈迦三尊像・薬師像等の飛鳥彫刻を始め各時代の仏像多数を蔵し、１９４９年に焼失した金堂壁画は、遠くインドの様式をも伝え、７４５年頃完成したらしい）。

特攻平和観音像（陸・海軍二体）

池中に立つ「夢違観音像（世田谷山観音寺）」

知覧・特攻平和観音像

聖徳太子二王子立像（東京・宮内庁蔵）
聖徳太子の像として伝えられている、我が国最古の肖像画

終戦後、荒廃した祖国復興祈願の象徴として、また、その祖国を護ろうとして散華された幾百万の戦没者の御霊の成仏を祈願するため、法隆寺に願い出て、聖徳太子ゆかりの秘仏「夢違観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作し、「平和観音像」として奉戴する許可を得、昭和25年10月10日に「平和観音会」を発足させた、静岡市清水寺住職吉井成純僧正と日光山輪王寺華蔵院（天台宗）住職関口　直大僧正（大正大学教授）のお二人が、何故法隆寺夢殿に祀られている「夢違観音像」を特に奉戴されたのか、今となっては知る由もないが、筆者が推察するところ、我が国の古代史上、国の内外共に極めて困難な時期に、初の女帝である推古天皇の皇太子・摂政として、天皇を補佐し、国の組織を固めるとともに、国の進むべき道として、また国民精神のあるべき姿として「和をもって貴し」とされた、その教示に学ぼうとされたのではなかろうか。そして、如何なる国難、艱難があろうとも、それを克服して新しく甦る、悪夢を正夢に変え、戦乱を平和に変えることを願い、戦後の荒廃した日本を新生させるべく発願

されたのではなかろうか、と考えるのである。

聖徳太子は、第31代用明天皇の皇子として西暦574年（敏達3年）にお生まれになった。母は第29代欽明天皇の皇女穴穂部間人皇女である。御本名は、厩戸皇子。豊聡耳皇子・法大王・上宮太子とも称される。幼少の頃より聡明で、内外の学問に通じ、深く仏教に帰依し、593年、叔母に当たる第33代推古天皇の即位とともに皇太子となり、また摂政として、内政・外交・仏教興隆に力を尽くされた。太子が摂政となられた当初は、任那回復のための新羅征討が重大問題であったが、600年に軍隊を派遣して一応の成果を収め、更に新羅問題を有利ならしめ、先進文物を輸入するために中国の覇者隋との国交も開始した。内政面では、603年に冠位十二階を定め、604年には十七条の憲法を制定し、豪族の勢力を抑えて、天皇を中心とする集権的官僚国家の樹立を進めた。仏教の興隆のため、四天王寺や法隆寺等多くの寺院を建立し、仏典の注釈書たる『三経義疏』を著された。622年（推古30年）に薨去され、大阪府南河内郡磯長陵に葬られた。

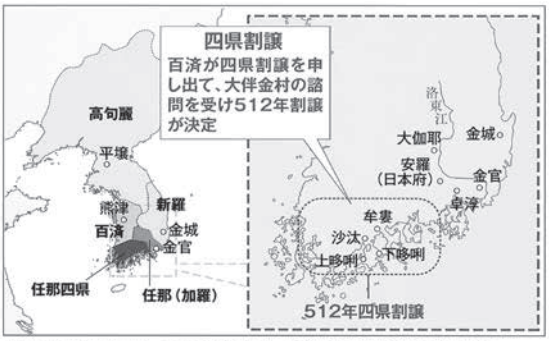
二　冠位十二階の制と十七条の憲法

前記のように聖徳太子は、6世紀末の593年、19歳の若さで推古天皇の皇太子となり、同時に摂政として、国の指導者となられたのであるが、それまでの6世紀の国内情勢は容易ならざるものがあった。有力豪族間の抗争は絶えず、特に皇位継承を巡る争いや仏教伝来による抗争は、大和朝廷の危機的状況をもたらし、加えて朝鮮半島を巡る闘争や中国との外交問題は非常な危険をはらんでいた。

6世紀の初め頃、第25代武烈天皇は皇子も皇女ももうけることなく崩御されたため、皇嗣がいなくなるおそれがあった。そこで大連・大伴金村らは、当時越前の三国にあられた、応神天皇の5世の孫に当たる男大迹王を迎えようとした。男大迹王は三国から河内の樟葉宮に移ったものの「自分には天子の才能がなく力不足である」と言って皇位に就くことを固辞した。それでも金村ら群臣が強く懇願してようやく即位され、第26代継体天皇となられた、とされているが、諸豪族割拠のその時代を考えると、恐らく継体天皇は、大和の諸豪族に推戴されたのではなく、実力で、大和にあった対立勢力を打ち倒し、約20年の闘争の後、ようやく即位されたものと思われる。そして、大和の中心をなす磐余の玉穂を都とされた。しかし、動乱はその後も続いた。翌年、九州で筑紫の国造岩井の乱が起こった。新羅と通じ、火の国（佐賀県・熊本県）、豊の国（福岡県の一部と大分県）を根拠としたかなり大きな反乱であった。そこで天皇は、物部麁鹿火大連を大将軍として筑紫に派遣し、翌年乱を平定した。継体25年、天皇は病気が重くなり、磐余玉穂宮で崩御された。御年43歳（『古事記』）とも81歳（『日本書紀』）とも言われている。

次いで第29代欽明天皇の在位中の最大の出来事は、仏教の伝来と任那への出兵である。朝鮮半島では新羅が強大化し、その圧迫を受けて百済が軍事的援助を求めて仏教を伝えて来た（西暦538年とも552年とも言われる）。同じく新羅による任那の併合に対抗して日本からの出兵もなされた。

欽明天皇は百済の聖明王から仏像、仏具、経典を献上され、派遣された使者から仏教の功徳を聞くと、大いに喜ばれたが、自ら決めることなく、群臣に尋ねられた。すると大臣・蘇我稲目は、「西の諸国はみな礼拝しているので、日本も礼拝すべき」と答えた。一方、大連・物部尾輿と中臣鎌子は、「蕃神（仏のこと）を拝めば国つ神の



朝鮮半島情勢　百済が打ち出した「任那四県割譲」を継体天皇が受け入れたことにより、任那は不信感を募らせ新羅に急接近する。

磐井の乱の関連地域
磐井は新羅と内通し、ヤマト政権と交戦。1年半後、ヤマト政権は御井の決戦で磐井を破り勝利した。

怒りを受ける」と言って反対した。

そこで欽明天皇が、稲目に試しに礼拝させてみると、国中に疫病が流行り、若死にする民が多く出た。尾輿と鎌子は「これこそ仏を礼拝したことが原因だ」と言って、天皇の許しを得て仏像を捨てたり、寺を焼いたりした。

因みに、この仏教伝来の年代については、538年説が有力だが、『日本書紀』の552年（欽明13年）説も、朝鮮半島の情勢と外交過程を考慮すると、一概に否定し難い。562年（欽明23年）、新羅は遂に任那を滅ぼした。そこで、欽明天皇は、紀男麻呂（きのおまろ）を大将軍として新羅に兵を送ったが、任那を回復することはできなかった。

571年（欽明32）、欽明天皇は病が重くなり、崩御された。

次の第30代敏達天皇は、尾輿の子・物部守屋（もののべのもりや）を大連とし、稲目の子・蘇我（そがの）馬子（うまこ）を大臣として政治に当たらせたが、二人は仏教を巡って激しく対立した。敏達天皇御自身は、仏法を信じることなく、歴史や文章に関心があったが、馬子が仏教を崇拝することを許しておられた。ところが、585年（敏達14年）、国中に疫病が起こり多くの死者が出ると、排仏派が仏教のせいだと天皇に訴え、寺や仏像を焼き、更に尼僧を捕らえて鞭で打つなどした。

その年、敏達天皇は、任那復興のため使者を派遣しようとしたが、天皇と守屋が突然、庖瘡に罹ったため計画は中止となった。その後国中に庖瘡による死者が出たため、人々は「仏像を焼いた罪だろう」と言ったという。

同年、敏達天皇は、病が重くなって崩御された。

次の第31代用明天皇は、第29代欽明天皇の第4皇子で、敏達天皇の弟に当たる橘豊日尊（たちばなのとよひのみこと）である。

用明天皇は仏法を信じ、かつ、神道を尊ばれたという。先代同様、崇仏派の蘇我馬子が大臣に、排仏派の物部守屋が大連になったが、仏教を巡って激しく対立する二人の間で、天皇は両方の立場を容認しながら政治を行った。

用明元年、密かに皇位を狙っていた穴穂部皇子（あなほべのみこ）（用明天皇の異母弟）が、豊御食炊屋姫（とよみけかしきやひめ）（敏達天皇の皇后、後の推古天皇）に言い寄ったが、敏達天皇の寵臣・三輪君逆（みわのきみさかう）に妨げられた。すると皇子は、守屋を遣わし、三輪君逆を殺させた。

用明2年、天皇は病気になり、仏教に帰依したいと群臣に相談されると、馬子と守屋が対立し、守屋を助けようとした中臣勝海が舎人に殺された。

天皇は、そのような両派の抗争の中で、587年、在位僅か3年で崩御された。

用明天皇が崩御されると、物部守屋は穴穂部皇子を天皇にしようとした。ところが、この謀を知った蘇我馬子は兵を遣わして穴穂部皇子を殺し、更に物部守屋を滅ぼそうとした。こうして抗争を続けていた馬子と守屋が遂に雌雄を決することになった。

馬子が率いる軍勢には、欽明天皇の第12子である泊瀬部皇子（はつせべのみこ）や用明天皇の皇子である厩戸皇子（うまやとのみこ）（聖徳太子）が加わった。一方の守屋は砦を築いて馬子の軍勢を迎え撃った。戦いは守屋軍の勢いが強く、馬子の軍勢は三度も退却するほどであったが、守屋が木の上から射落とされて殺されると、守屋の軍勢は崩れ去った。

この戦いによって長く権力の中枢にいた物部氏は滅び、蘇我氏が権勢を振るうようになった。

その後、泊瀬部皇子が即位（587年）して第32代崇峻天皇となられた。

崇峻天皇は、任那の再建に力を注がれたが、進展はなかった。やがて馬子と対立するようになり、馬子は腹心の東漢直駒（やまとのあやのあたいこま）に天皇を殺させた（592年在位6年）。

崇峻天皇が暗殺された後、国内は暫く騒然とし、皇位は空白となっていたが、群臣相諮り、第30代敏達天皇の皇后の豊御食炊屋姫に皇位に就くよう要請したが、皇后は辞退された。しかし群臣が要請し続けると三度目にしてようやく聞き入れて即位された（592年）。第33代推古天皇である。

推古天皇は容姿端麗で、物事を処するに乱れることがなかったという。18歳で敏達天皇の皇后となり、34歳の時に天皇が崩御され、39歳の時に暗殺された、我が国最初の女帝である。

推古天皇は、即位されるとすぐに厩戸皇子（聖徳太子）を皇太子に立て、政治を全て任せた。即ち聖徳太子の摂政である。また、天皇の母は蘇我稲目の娘の堅塩媛（きたしひめ）で、実力者の蘇我馬子とは叔父と姪の関係にあった。したがって当時の政治の実態は、天皇の下に聖徳太子と蘇我馬子が協力し合って事を進めたと見られている。

推古天皇時代の内政として有名なものに「冠位十二階」と「十七条憲法」の制定がある。

冠位十二階は冠の種類によって位階を「徳、仁、礼、信、義、智」の大小十二に明示したもの（冠の色は、紫、青、赤、黄、白、黒の六色に、それぞれ濃淡を付けて十二色とした。）。

十七条の憲法は、我が国最初の成文法で、「和をもって貴しとなし」で知

られるように、官吏や貴族が守るべき政治理念や道徳を記したものである。別掲参照）。いずれも、太子が中心になって制定したもので、太子の政治理念を表している。

外交の面でも、中国と対等であろうとする太子の姿勢が色濃く現れた。607年（推古15年）、遣隋使の小野妹子が隋の煬帝に渡した国書の書き出しには「日出処天子、書を日没処天子に致す、恙なきや」とあり、日本の君主も中国の君主も、ともに最高君主である「天子」として対等であることを主張して、煬帝を立腹させたという。

翌608年（推古16年）、妹子が帰国すると、再度妹子を隋に遣わしたが、その時持たせた国書には「東の天皇が謹んで西の皇帝に申し上げます」と書いた。これが「天皇」という称号が公式に使われた最初である。

宗教政策としては、天皇と皇太子は共に仏教の興隆を計り、各地に寺が建てられたり、高麗や百済から僧が渡来したりした。596年（推古4年）には法興寺（飛鳥寺）が落成し、605年（推古13年）には仏像が造られ、元興寺（飛鳥寺は法興寺とも呼ばれたが、平城京内に移されてからは元興寺と呼ばれた）に安置された。その一方で、神祇も敬い、天皇は群臣に神祇の祭祀を怠ることがないよう詔した。また、皇太子と馬子は、群臣を率いて神祇を祀り拝んだ。

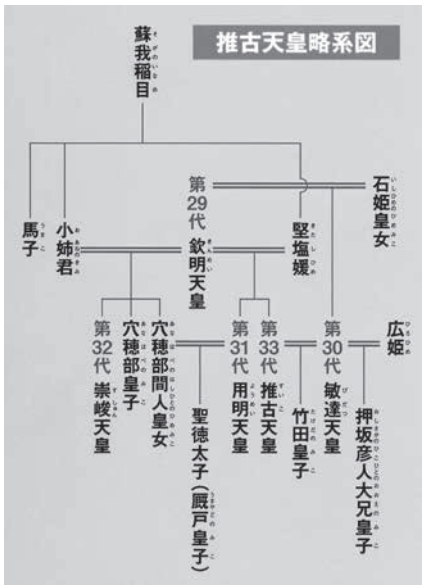
622年（推古30年）太子が薨去された。諸王や群臣、天下の人民は大いに悲しんだ。泣き叫ぶ声が巷に溢れたという。

太子が薨去された後、天皇は馬子の助けを借りながら政治を行われた。

623年（推古31年）に新羅が任那を討つと、天皇は新羅に兵を送った。すると、新羅は降伏した。

624年（推古32年）、馬子が天皇の直轄領の一つである葛城県を、元は蘇我氏の本拠地だったという理由で、私領として賜りたいと願い出た。ところが天皇は「馬子大臣は自分の叔父であり、これまで如何なることも聞き入れてきた。しかし今、県を失えば、後世の帝が『愚かな女が天下を治めたために県が亡んでしまった』と言われるだろう。そうなれば、自分だけが不明とされるばかりでなく、大臣も不忠とされ、後世に悪名を残すことになるだろう」と言われて許されなかった。

626年（推古34年）に馬子が亡くなり、2年後には天皇も病が重くなられて、崩御された（628年、在位37年）。



小野妹子　肖像画（京都・華道家元池坊総務所蔵）滋賀の豪族の家系から、高い才能を認められ、難しい遣隋使代表に抜擢された。

煬帝　肖像画　隋の第2代皇帝

三　聖徳太子の「和」の宣言と外交

前記のように聖徳太子は、国家の基本理念と国民精神の基盤を「和」に置き、十七条憲法の第一条に「和をもって貴しとなす」と定められた（604年、推古12年）。

既に記述したように、当時日本は、朝鮮半島における我が国の権益（日本府の置かれた任那の領地や権益）を侵そうとする新羅との戦闘の泥沼状態を迎えていた。派遣軍の将軍の戦病死、後任の将軍の撤兵等である。聖徳太子は、これによって停戦を決断された。603年2月のことである。そして、そのことを先ず、十七条憲法の第一条に掲げられたのではないか、と考えられる。即ち、「和」とは、抽象的な人倫の和ではなく、極めて具体的な停戦の精神の反映であったのではないか。そのほか、国内における豪族の勢力争いや抗争、反乱もその背景にあったであろう。その上で、人倫の和はもちろん、根幹の理念として存在すると考えられるが、何よりも和の宣言が行われたことが、停戦との深い関係を示すのではなかろうか。

そして太子は、その3年後の607年（推古15年）、遣隋使を派遣されたが、これは新羅から隋へという、外交政策

の転換を意味しており、単に軍事を止めたのではなく、文明の中心国との直接外交へと政策を転換するための停戦であった。このより大きな見通しの中で、2万5000人にも上る兵力の動員、人名の殺傷というリスクを避けたのではなかろうか。

聖徳太子の十七条憲法の精神、その理念と政策は、後々の日本の国政の上に大きな規範を示すこととなったのである。

十七条憲法

第一条　和をもって貴しとなし、忤うこと無きを宗となす。（下略）

第二条　篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり。（下略）

第三条　詔を承れば必ず謹め。君を則ち天とし、臣を則ち地とす。天覆い地載す。四時順行し、万気通うことを得。地、天を覆えさんと欲すると きは、則ち壊ることを致さんのみ。（下略）

第四条　群卿百寮、礼をもって本とせよ。（下略）

第五条　餐りを絶ち欲を棄て、明らかに訴訟を弁ぜよ。（下略）

第六条　悪を懲し善を勧むるは、古の良典なり。（下略）

第七条　人各任有り。掌ること宜しく濫れざるべし。（下略）

第八条　群卿百寮、早く朝し晏く退け。（下略）

第九条　信は是れ義の本なり。事ごとに信有るべし。（下略）

第十条　忿りを絶ち瞋りを棄て、人の違うことを怒らざれ。（下略）

第十一条　功過を明察し、賞罰は必ず当てよ。（下略）

第十二条　国司国造、百姓を斂とると勿れ。民に二君靡し、民に両主無し。率土の兆民、王をもって主と為す。（下略）

第十三条　諸の官に任ぜらるる者、同じく職掌を知れ。（下略）

第十四条　群臣百寮、嫉妬有ること無れ。（下略）

第十五条　私に背き公に向かうは、是れ臣の道なり。（下略）

第十六条　民を使うに時をもってするは、古の良典なり。（下略）

第十七条　大事は独り断ずべからず。必ず衆とともに宜しく論ずべし。（下略）

【学生提言】沖縄の大学生として憲法を考える

琉球大学法文学部四年
外間　完信

「注・本稿は全日本学生文化会議発行の『大学の使命』239号に掲載されたものであるが、お許しを得て転載させていただいた。」

一　高まり続ける中国の脅威と、我が国がおかれた状況

平成二十二年九月の尖閣諸島中国漁船衝突事件以来、中国の我が国に対する挑発、威嚇は、中国軍艦隊の宮古水道通過、活動家の尖閣違法上陸、火器管制レーダーの照射、そして、防空識別圏の一方的な設置と、次から次に起こり、その脅威は高まる一方です。

尖閣諸島は、明治期に我が国が慎重な手続きを経て編入、終戦後しばらくは米国の統治下にありましたが、再び日本領となった島々であり、中国は全く関係がありません。しかし中国は、一九七一年から突如として領有権を主張し始めました。また、周知の通り、中国の狙いは尖閣諸島に止まりません。中国は沖縄県までも自らの版図に入れるべく、様々な工作を行っております。

私が生まれ育った沖縄は、昔は琉球王国という一つの国でありました。故に、「うちなーぐち」という独特の方言がありますが、それは日本語の一方言でありますし、特異ではあっても、日本の文化圏に入ります。明治期には、正式に日本の一部となり、日露戦争においては、沖縄県民も当然、国民として戦争に協力しました。ロシアのバルチック艦隊の北上を都島の漁民が早期に発見し、手漕ぎ舟で遠くの別の島の通信所まで通報しに行って国のために協力した、という久松五勇士の逸話も残っております。また、大東亜戦争末期の沖縄戦においては、全国から集まった将兵が上陸した米軍に対して決死の戦いを挑む中、沖縄県民は、老若男女を挙げて、これに協力し、海軍沖縄根拠地隊司令官の大田實中将は、「沖縄県民斯ク戦ヘリ」という言葉を電文で残された程であります。

そして沖縄は、戦後二十七年間、米国の統治下に置かれました。が、昭和四十七年に、日米政府間の交渉と、祖国への復帰を願う沖縄県民の運動と、これを支援してくださった方たちとの協力で、沖縄は祖国日本に復帰することが出来ました。

民族的にも文化的にも日本の一部で

あり、また、日露戦争、大東亜戦争という国難には、日本国民として協力し、戦後は、祖国への復帰を願い続けてそれが叶ったというのが、沖縄の歴史なのです。しかし、チベットやウイグルで虐殺を続ける中国が突然、「沖縄は中国の一部だ」と言い出すようになり、尖閣諸島を奪おうとしていますが、「勝手なことを言うな」と腹立たしい気持ちになります。私は、一国民として、また、一沖縄県民として、中国の横暴に声を上げたいと思います。

しかし、これまでのように、中国の主張の不当さを非難するだけでは、中国は挑発、威嚇をやめないのではないか、と私は思います。中国は、防衛の力が比較的手薄な日本に対して挑発的ですが、アメリカのように軍事力も発言力も大きい国に対しては、余り挑発をしません。そのように、「力」の論理を何よりも重視する中国に、尖閣・沖縄とその周りの海で、勝手放題にさせないためには、「力」即ち、日米安保体制と自衛隊の装備、法制面での強化は避けては通れません。

ところが、日米安保体制のパートナーであるアメリカは、力が相対的に弱まってきており、オバマ大統領自身、シリア内戦に対するアメリカの対応を問われ、「アメリカは世界の警察官ではない」ということを、一回の答弁の中で、二度も述べています。防衛をアメリカに任せておけばよい時代は終わったということだと思います。防衛をアメリカに頼れなくなった状況で、誰が尖閣・沖縄を守るのでしょうか。

我が国が、憲法を改正し、自前の軍隊を持って中国に「寄らば切るぞ」という意思表示をする他ありません。中国は、自衛隊の近代的な装備を目の当たりにしてはいても、日本は憲法九条があるために、まともに交戦権が発動できないということを、わかっているために、日本に対して挑発的な行動が取れるのだと思います。そうである以上、中国の挑発を止めるためには、憲法九条の改正をしなければ、いくら近代的な装備をそろえた自衛隊でも中国に対する抑止力にはならないでしょうし、尖閣・沖縄周辺から緊張が無くなることはありません。尖閣・沖縄で中国が勝手放題にするということは、我が国の主権の侵害であることはもちろん、尖閣諸島を抱える沖縄県が真っ先に危険に晒されるということなのです。

尖閣諸島は、石垣市に属しますが、その周辺で漁業を営む宮古、八重山の漁師の方々は、漁場で、実際に中国や台湾の大型船や公船と対峙することになり、直接、命の危険に晒されます。沖縄は、一部の人たちによって「反基地」という自国の防衛に否定的な言論に支配されています。ですが、先述したように、中国の脅威に、最も近くで晒されているのが、沖縄であるということを考えれば、沖縄を守るためにこそ、「憲法改正」が必要なのだと思います。

二　自立した国家となるためにも

私が、憲法改正を願う理由は、尖閣・沖縄を狙う中国の脅威に対処するためだけではありません。我が国が、自分の国を自分で守ることができる自立国家になってほしいからでもあります。

左派や護憲勢力は、安全保障上必要な政策を実行しようとする政府に対して、よく「アメリカ追従」などの言葉でもって批判します。これらの批判は、左派や護憲勢力が思想上、反米的な感情を持っていることも関係すると思いますが、案外的外れだとは言えないように私は思います。中国や北朝鮮の脅威に対処するためには、日米の同盟関係が必要不可欠ではありますが、我が国は主権国家ですから、我が国としての判断を、アメリカの顔色を窺いながら行わないといけないというのは、正常な状態ではありません。

なぜ、このようにアメリカの顔色を窺い続けなければならないかというと、それも結局、憲法と我が国の防衛のあり方に原因があるのだと思います。日米安保条約は、これまでの政府の努力により、改定もされましたが、アメリカ側はヒト（兵力）を、日本側はモノ（施設や物資）を分担するという基本的な形は変わっていません。そして、これまで我が国は、集団的自衛権の行使すらできない状況にありましたから、日米安保条約は「アメリカは日本を守るが、日本はアメリカを守れない」不平等な条約であると言えます。アメリカに守ってもらっているのですから、守ってくれているアメリカの意向に従わざるを得ないというのは、必然的な結果だと思います。これは大変情けない事態であると思います。

私がそう思うのも、かつて日本の自立の為に戦われたご英霊のことを学んだからです。昨年の六月二十三日、沖縄慰霊の日には、沖縄県護国神社に於いて、鉄血勤皇隊をはじめとする沖縄戦の学徒隊をお祭りする「殉国沖縄学徒顕彰祭」を学生主催で斎行させていただきました。私は、昨年に続いて、今年も殉国沖縄学徒顕彰祭を行いますが、今年は、新たに心に残った学徒隊のお姿があります。それは、南風原陸

軍病院壕での、ひめゆり学徒隊のお姿です。南風原陸軍病院壕には沖縄戦の当初から、傷病兵が多く搬送され、壕内は、手足の無い兵隊、傷口から蛆の沸いている兵隊、脳症を起こして気が狂ってしまった兵隊などで一杯になり、血や汗、汚物の臭いで、想像を絶する悲惨な状況でありました。しかし、ひめゆり学徒隊の方々は、「学生さん、学生さん」と頼りにされて、傷病兵の一人一人を丁寧に看病し、壕内は勿論悲惨ではありましたが、傷病兵達を励ましました。ひめゆり学徒隊を引率していた西平英夫教授は、そのお姿を「母ノ如ク次第ニ悪化スル傷ヲ眺メテ姉ノ如ク労リ励マシ誠心誠意尽シテ看護」した、と記しております。うら若き女学生たちが、一生懸命傷の手当てや看病をしてくれて、傷病兵達はとても励まされ、安らぎを得たであろうことは想像できます。沖縄戦は悲惨な戦いではありましたが、鉄血勤皇隊の方々の鬼神も哭く戦いぶりと、学徒看護隊の慈母の如き献身も記憶されるべきであります。

沖縄戦は、鉄血勤皇隊や学徒看護隊の協力もあって、日本軍は圧倒的な戦力を誇るアメリカ軍を類例を見ない程に苦戦させ、アメリカ側にも敗北意識を抱かせて、国体廃止の考えを思いとどまらせることになりました。しかし同時に、アメリカに守ってもらい、アメリカに従わざるを得ない現在の我が国の状況を見たら、その英霊方は何と思われるだろうか、ということも私は考えてしまいます。

私は「自立」とは、国民皆が、国際社会の中での我が国のあり方について、心からの誇りを抱けるような大義を持った国になることだと思います。かつて我が国は、植民地支配拡大を進める欧米列強からの自存自衛と東亜開放の大義を掲げて大東亜戦争を戦いました。この時の日本の話を聴くと、私は胸が熱くなります。しかし、今の我が国では「誇り」を抱きにくいと思います。それは、今の我が国には、国民皆が共有しているような国家像、大義がないからだと思います。同盟国から言われたから、自衛隊を中東に派遣するのではなく、「国際平和について、日本はこう思っているから、自衛隊を派遣する。」と堂々と言えるような大義を自分たちで見つけ、言葉にしないといけないと思います。

また私は、誇りを持てる我が国日本であってほしいと思っておりますが、自分たちの領土、領海、領空の防衛すら、米軍の戦力頼み、という状況が続くようでは、自分の国である日本に対して誇りを持てないのではないかと考えます。中国の覇権主義が脅かしている航海の自由、航行の自由などの地域秩序を守るという国際的な課題に取り組むには日米の同盟関係が大事ですが、どこの国もそうであるように、「自分たちの国」を守る主体者は、「自分たち日本国民」であるはずです。自分の国である日本に誇りを持ちたい、そういう思いから、私は、自分の国は自分で守るべきだと考えるようになりました。

今は、反基地運動をする県民の姿ばかりが報道されますが、沖縄県民は、日本国民として国難に共に立ち向かい、戦後は祖国日本に復帰したいという強い思いで、祖国復帰が出来ました。その憧れた日本という国が、かつて敵として戦ったアメリカの庇護下にあるという状況を、私は変えたいと思います。

そのためにも、憲法の改正は必ず成し遂げなければならないと思います。沖縄は、反基地運動、反戦教育の強い影響下にあり、基地の存在すら否定的に捉える向きが目立っていましたから、これまでは、憲法改正はほとんどタブーのように扱われて来ました。しかし、それは、「沖縄さえ変われば、全国での憲法改正のタブーも無くなる」ということだと思います。

「自立」した国家には、多くの若者、学生も生きがいを見出し、貢献したいと考えるようになる筈です。私は琉球大学で、「沖縄から日本を考える学生の会」というサークルの会長をしていますが、今年は、九月の学園祭で、憲法改正の必要性についての展示活動を行い、「中国の脅威から県民を守るためにも憲法改正を！」、「日本が自立国家となるためにも憲法改正を！」ということを学友に訴えたいと思います。

◇　◇　◇

『大学の使命』通巻２３９号
発行日　平成26年６月23日
発行人　外村　聖典
編集人　椛島　明実
発行所　全日本学生文化会議
〒１５３－００４２
東京都目黒区青葉台
３－10－１－６０２
電　話　０３－３４７６－５７５９
ＦＡＸ　０３－３４７６－５７１０
購読料　３０００円（年間）
郵便振替口座
００１７０－５－５４５３１６

沖縄県石垣島に第八飛行師団誠第十七戦隊長「伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑」建立される

平成25年8月15日、国境の島と言われる沖縄県八重山郡（八重山諸島）石垣市（石垣島）新港地区緑地公園内の青い海を望む景勝地に、特攻隊勇士の顕彰碑「伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑」が建立され、その除幕式と慰霊祭が盛大に斎行された。

そして、その建立の趣意・経緯と除幕式及び慰霊祭の模様等を纏めた「建立祈念誌」が、この程同顕彰碑建立既成会（会長三木　巌氏）から当顕彰会宛に送られてきた。

伊舎堂用久中佐とは、昭和20年3月26日の午前4時、特攻機（九九式襲撃機）4機、直掩機（三式戦「飛燕」）6機を率いて石垣島白保基地から出撃し、沖縄本島上陸作戦を企図する米軍機動艦隊を慶良間諸島西方海上に捕捉し、同5時50分全機突入、大戦果（大型空母1隻、中型空母1隻、戦艦1隻撃破）を挙げて10名全員が散華され、沖縄戦における陸軍特攻第1号となった第八飛行師団（台湾・師団長山本健児中将）誠第17飛行隊長伊舎堂用久大尉（戦死後二階級特進・中佐、陸士・航士55期）のことである。

第八飛行師団誠第17飛行隊長
伊舎堂用久大尉（二階級特進中佐）

伊舎堂大尉は、沖縄戦における第八飛行師団特攻隊員のうち、唯一人の石垣島出身者であり、部下思いで信望厚く、優れた統率力を発揮し、見事その任を全うされた。地元の尊崇も篤く、多くの人々の賛同・協力を得て、伊舎堂大尉とその部下及び石垣島から出撃して散華された全特攻隊員31柱の偉功を讃えてその名を刻し、御霊を慰霊するため、この碑を建立したとのことである。その趣意と経緯は次の碑文に明らかである。

また、除幕式及び慰霊祭の模様は、これを報道した地元の新聞・八重山日報（平成25年8月16日付け）に詳しく掲載されているので、その一部を後ろに転載する。なお、顕彰碑建立既成会では、全国から集まった建立寄附金の剰余金150万円を石垣市奨学基金に寄附するため、本年2月5日、石垣市役所を訪れ、三木会長から中山義隆市長に目録を手渡した。

「　碑　文

大東亜戦争終結六十八年を経たわが国は、戦後の荒廃を乗り越え、平和で豊かな生活を送ることが出来ています。現代のわが国の平和と繁栄は、国家存亡の危機に殉じた英霊と戦争の犠牲となった多くの方々の礎によってもたらされたことを心に留め、その史実を後世に伝えていかなければなりません。大東亜戦争末期、戦況の打開を図るべく、大日本帝国陸軍は特別攻撃隊を編成し石垣島にあった特別攻撃隊の基地からも、鎮護の任に当たるべく、若者達が身命を擲って出撃し、千尋の海に散華しました。

大日本帝国陸軍第八飛行師団誠第十七飛行隊隊長であった伊舎堂用久大尉率いる伊舎堂隊四機と直掩機六機は、昭和二十年三月二十六日午前四時に、石垣島白保にあった基地より特別攻撃隊の先陣を切って出撃し、慶良間列島西方海上の敵空母群に特攻を行い、その戦果は全国に大々的に報じら

れました。

郷土と国を愛し、悠久の大義に生きる精神により散華した伊舎堂用久中佐（特別攻撃後、二階級特進）と隊員の偉功を後世に伝え、これからの時代に於いても、郷土と国を護る崇高な精神を育み、恒久平和を希求する為、伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑をここに建立します。　平成二十五年八月十五日

遺　詠　　伊舎堂用久中佐

指折りつ　待ちに待ちたる機ぞ来る
千尋の海に散るぞ楽しき

伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑
建立既成会
会　長　三木　巌
揮　毫　豊平　峰雲」

◇

「序　文（建立記念誌）
既成会顧問　伊藤　玲子

「日本を失ってはならない」

それは沖縄の石垣島を指すことであります。日本列島にとって沖縄の石垣島が如何に要衝の地点であるか、かつて伊舎堂用久中佐ら31名の方々が昭和20年3月26日石垣島白保の地から、沖縄に停泊中のアメリカ航空母艦を攻撃し、壊滅的打撃を与えました。

国境の島である石垣島から特別攻撃隊として飛び立った隊員たち、いまの日本があるのも伊舎堂隊はじめ尊い犠牲となられた先人の方々の上にあることを常に忘れずに、後世に語り伝えてゆかなければならない責務が私達の使命であると思います。」

◇

伊舎堂大尉は、大正9年（1920年）6月12日、沖縄県八重山郡石垣町（現石垣市）登野城で、税務署に勤務する父用和、母ミツの三男として生まれた。登野城小学校卒業後県立宮古中学校に入学したが、翌年、県立第二中学校（現那覇高校）に転校した。昭和13年同校を卒業し、同年12月1日陸軍予科士官学校に入校（陸士55期）、翌14年11月15日同校を卒業、士官候補生として隊付勤務後、翌15年4月陸軍士官学校（本科）に入校、昭和16年7月同校を卒業して陸軍少尉に任官したが、間もなく航空に転科して陸軍航空士官学校に学生入校し、翌17年3月卒業、更に宇都宮陸軍飛行学校を修了して同年9月、航空部隊操縦士官として勤務を開始した。昭和18年3月1日陸軍中尉に進級、同月19日、第七直協飛行隊に所属し、同年3月末、下志津陸軍飛行学校を修了して4月には中国戦線に派遣された。

なお、同期陸士55期生の航空転科は180名の多数に及び、うち119名が操縦者として各地に参戦した。今次大戦における陸士55期航空科の戦没者は317名で、卒業生の50％に及び、操縦者にあっては、340名中245名に上り、72％の高率となっており、特攻戦死者も12名に上っている。

伊舎堂中尉の所属していた第七直協飛行隊は、太平洋戦線の戦局緊迫化に伴い同戦線に投入されることとなり、昭和19年2月24日、中国を出発し、3月1日、陸軍飛行学校や航空基地のある静岡県浜松市に到着、約1ヵ月間、対潜水艦警戒、船団援護など海上飛行の訓練を受け、4月5日、浜松を出発して新たな任地である台湾花蓮港市へ移動し、引き続き海上での飛行訓練に励むとともに、台湾東方海域での船団護衛、米潜水艦に対する索敵飛行等の実戦に従事した。

米軍は昭和19年10月10日、南西諸島に初の大規模空襲を行い、同月12日から16日の台湾沖航空戦では、沖縄や台湾の各基地にも、多数の米軍機が来襲し、激しい戦闘が行われた。

陸軍第八飛行師団は同年12月8日、花蓮港基地で特攻隊・誠第17飛行隊を編成し、その隊長に、同年12月1日大尉に進級したばかりの伊舎堂大尉を任命した。隊員は隊長を含めて11名、内訳は陸士出身2名（伊舎堂大尉55期24歳、石垣　仁少尉56期23歳）特別操縦見習士官出身4名（川瀬嘉紀少尉・特操1期24歳、芝崎　茂少尉・特操1期24歳、大門修一少尉・特操1期24歳、久保元治郎少尉・特操1期23歳）、特別幹部候補生出身1名（安原正文少尉・幹候9期24歳）、少年飛行兵出身4名（黒田　釋軍曹・少飛11期21歳、有馬達郎伍長・少飛15期17歳、林　至寛・少飛15期17歳、小林　茂伍長・少飛15期17歳）であった。誠第17飛行隊は翌昭和20年2月18日、伊舎堂大尉の生まれ故郷である石垣島の白保基地に進出した。しかし、伊舎堂大尉は、公私の別に厳しく、時折、妹さんが手作りのご馳走を持参して面会に来ても会わなかった。「部下は他府県出身者がほとんどで、帰ろうと思っても帰るところもない。いくら肉親でも部下の手前忍び難い」と、飛行団長柳本大佐の勧めにも応ぜず、最後まで会わずに通したという。昭和20年3月26日の出撃の日にも、大尉の出撃を知らずにいた両親は、大尉の姉妹が料理した心尽くしの慰問品を持って基地に赴き、途中村役場まで来て「今暁出撃、特攻戦死」の旨を知らされたという。

3月26日の払暁4時、石垣島白保基地から出撃した誠第17飛行隊の特攻隊

員は、隊長伊舎堂大尉のほか、前記の川瀬嘉紀少尉、芝崎　茂少尉、黒田釋軍曹の4機（九九式襲撃機）4名と直掩の任務に当たる第23独立飛行中隊の阿部久作少尉・少候23期29歳、岩本光守軍曹・都城乗員訓練所12期20歳、須賀義栄軍曹・操縦学生90期23歳、長野光宏軍曹・少飛8期21歳、金井　勇軍曹・少飛11期21歳、廣瀬秀夫軍曹・少飛12期19歳の6機（三式戦闘機「飛燕」）6名で、午前5時50分、慶良間諸島西方洋上の米艦隊に全機体当たり攻撃を敢行して全員壮烈な戦死を遂げた。その10名の戦死者に対しては、即日、第10方面軍司令官から感状が授けられ、それぞれ二階級特進の栄誉が与えられた。

（飯田　正能記）

奨学基金に150万円

特攻隊顕彰碑余剰金を寄付

石垣市の教育に役立てて―と、伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑建立帰期成会（三木巌会長）は5日、石垣市役所を訪ね、石垣市奨学基金に150万円を寄付。三木会長が中山義隆市長に目録を手渡した＝写真。2013年8月15日に新港地区に建立した顕彰碑事業の余剰金を当てたもの。

同期生会は、沖縄戦の陸軍特攻第1号として石垣島白保から出撃した石垣島出身の特攻隊長、伊舎堂用久中佐（戦死時大尉、当時24）と隊員、合計31人の顕彰碑を終戦記念日に新港地区に建立。全国から予想を上回る寄付が集まり、建立事業の余剰金を寄付に当てた。

三木会長は「全国から多大な浄財を頂いた。日本を背負う人材を育てて欲しい、全国の（寄付者）みなさんの気持ちです」とあいさつ。

中山市長は「これからの日本を支える可能性がある子どもたちのために使いたい」と、お礼を述べた。

また、同席した伊舎堂中佐の甥の用八氏は「特攻隊員の気持ちが分かりきれていない部分がある。武士道の精神に通じる特攻隊員や戦没者の事実を伝えたい」と話し、「資料がたくさんあるので展示会をやりたい。白保の飛行場跡地の一角に出撃地を示すポールを建てたい」などと、希望した。

八重山日報　2014. 2. 6

八重山日報　2013年（平成25年）8月16日　金曜日

伊舎堂中佐の功績後世に

顕彰碑除幕

特攻31人の名前刻む

「千尋の海で安らかに」

沖縄戦の陸軍特攻第1号として石垣島白保から出撃し、米艦船に体当たり攻撃した登野城出身の特攻隊長、伊舎堂用久中佐（戦死時大尉、当時24）と隊員の顕彰碑が終戦記念日の15日、石垣市新港地区で除幕された。【4面に関連】

伊舎堂中佐と隊員の顕彰碑が除幕された＝15日午前、新港地区

顕彰碑には中佐の辞世の句「指折りつつ待ちに待ちたる機ぞきたる千尋の海に散るぞ楽しき」が刻まれた。中佐が指揮した陸軍第8飛行師団誠第17飛行隊だけでなく、沖縄戦で石垣島から特攻した31人全員の名前が刻銘された。

顕彰碑建立期成会（三木嬢会長）が5月に発足し、建立に向け協力を呼び掛けたところ、全国から目標の300万円を大きく上回る約500万円の募金が寄せられた。

期成会は「予想以上に反響が大きい」と話している。

顕彰碑が建立されたのは青い海を望む景勝地。除幕式で三木会長は「中佐たちは戦況不利の中、家族、故郷、国を思いながら飛び立った。千尋の海で安らかに休んでほしい」とあいさつした。中山義隆市長は「顕彰碑を平和学習の貴重な教材にしてほしい」と期待した。

顕彰碑は本体が約2㍍、台座も含めると約3㍍。タイトルは市出身の書家、豊平峰雲さんが揮ごうした。

碑文には「郷土と国を愛し、悠久の大義に生きる精神により散華した伊舎堂用久中佐と隊員の遺功」を後世に伝えるなどと記している。

会場を訪れた田中勝義さん（68）は「特攻隊に目をそむけてきた沖縄で、顕彰碑が建立されることは意義がある」と強調。

用久のおい、用八さんの孫で兵庫県に住む高校生の晴日さん（15）は「中佐のことは」自分でインターネットなどで調べた。勇気がある人だと思った」と話した。

参列者は正午に合わせ黙とう。続いて慰霊祭が開かれ、市詩吟老人クラブの詩吟や碑への献花などがあった。

中佐が率いる誠第17飛行隊の4機は1945年3月26日、直掩機6機とともに慶良間諸島沖で米艦船に突入。特攻した10人は二階級特進し、第10方面軍司令官から感状を授与され、全軍に布告された。米軍は同日、慶良間諸島に上陸している。

八重山日報　2013. 8.16

八重山日報　2013. 8.16

中佐の歌 涙ながらに

宿泊先の娘 米盛さん

伊舎堂用久中佐と隊員の顕彰碑除幕式には、特攻直前、中佐が宿舎にしていた白保の民家の娘、米盛美代子さん（68）が参列し、石垣島で歌い継がれてきた「伊舎堂隊の歌」を涙ながらに歌った。

中佐が宿泊していたのは米盛さんの両親、前盛善介、敏子さん夫妻宅。地元に住む親類が会いに来ても、中佐は他県出身の部下の手前、忍び難いとして会おうとしなかった。善介さんが代わりに面会を断っていたという。

特攻の日の早朝、中佐は善介さんに深々と頭を下げて家を出て行った。特攻の2カ月後に生まれた美代子さんは中佐を直接知らないが「物静かで、とても温かい人だったと聞いている」と話した。

この日は「伊舎堂隊の歌」の3番の歌詞「母の写真にひざまづきお先にあの世と参ります　国のおんため　お母さん　花と散ります　ああお母さん」を歌った。「親と話もできず先立つ子どもの気持ちを思った」と目を赤く潤ませた。

「物静かで温かい人柄」

頭下げ特攻に旅立つ

顕彰碑の石材を提供した大島彦成さん（87）＝白保＝も参列。大島さんによると、石材は明和の大津波で打ち上げられたものだという。「碑を見ると戦争を思い出す」と碑文を見上げた。

涙ながらに「伊舎堂隊の歌」を歌う米盛さん＝15日午後、新港地区

京都霊山護国神社 平成26年度「あゝ特攻勇士之像」慰霊祭に参列して

事務局　金子　敬志

平成26年5月25日（日）、京都霊山護国神社で行われた「あゝ特攻勇士之像」慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列しましたので、その概要を報告いたします。

一　慰霊祭の概要

当顕彰会は、事業の一環として全国の護国神社に「特攻勇士之像」の建立奉納を進めているが、京都霊山護国神社の「特攻勇士之像」は、その第11番目として平成24年4月29日に建立奉納されたものである。そのため、昨年は建立日の4月29日に慰霊祭が執り行われたが、今年は、第64回関西白鴎遺族会慰霊祭と合同で実施された。

ここで、関西白鴎遺族会について紹介する。以下は、関西白鴎遺族会のホームページからの転載である。

「終戦直後の昭和21年11月9日、未だ混乱と焦土の中の東京・築地本願寺において、1616名（内特攻448名）と最も多くの戦死者を出した海軍飛行科予備学生13期の復員同期生たちは、米軍MPに取り囲まれた中で第1回慰霊法要を行いました。本堂には、学業半ばにして大空に散華した愛息への悲憤と、友への申し訳ない慟哭が溢れ、「同期の桜」の斉唱が結実して、やがて海軍飛行科予備学生・生徒各期の戦没者2485名の慰霊と遺族慰問のため、遺族と生存同期生が結束し、昭和27年3月、社団法人白鴎遺族会が設立されました。

以来、靖國神社において毎年春秋2回の慰霊祭を行い、また活発な慰霊活動を続けてきましたが、会員の老齢化に対応し、地域に密着して会員の交流を深めるため、平成8年5月、全国組織の社団法人を解散して、13の地域の「白鴎遺族会」に分けて、慰霊事業を継続しております。」

白鴎遺族会は海軍飛行科予備学生・生徒の全ての戦没者を対象としているが、立ち上がりに飛行科予備学生13期生が関連したこと、また、13期生が予備学生約1万5千名の3分の1に当たる約5千名と数が多いためか、7名の元13期生の方がお元気に今回の慰霊祭に参列された。

慰霊祭はまず本殿において題64回関西白鴎遺族会慰霊祭が執り行われた。

慰霊祭終了後、「特攻勇士之像」前に移動して「あゝ特攻勇士之像」慰霊祭が行われ、顕彰会代表として私が最初に玉串奉奠を行い、その後参加者代表による玉串奉奠が行われ、「関西白鴎遺族会慰霊祭」と「あゝ特攻勇士之像」慰霊祭が終了した。

引き続き、神社の奥の山中に設けられた「昭和の杜」にある「白鴎顕彰之碑」前において碑前祭が行われ、当日の慰霊行事は全て終了した。

その後、斎館において懇親会が開かれたが、参加された13期予備学生の音頭による「同期の桜」「艦隊勤務」等の軍歌演習が行われ、和気藹々の懇親会となった。

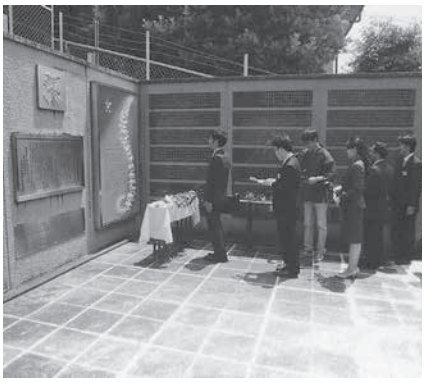
予定の時間が迫った時、13期予備学生加藤　忠氏の「5分前」の発声があり、懇親会は、予定時間どおりにお開きとなり、解散となった。

二　所見

本年は、海軍関係の「関西白鴎遺族会」の慰霊祭と同時開催であったためか、「あゝ特攻勇士之像」慰霊祭に、陸軍関係者の参列がなかったようであった。慰霊祭全体として見た場合、20歳～30歳代の若い人の参加が約20名程度あり、他の慰霊祭に比べて多いように思われた。

関西白鴎遺族会会長山田正克氏も40歳代であり、若い人への継承が進んでいると感じた。

「あゝ特攻勇士之像」慰霊祭



「白鴎顕彰之碑」碑前祭

第47回豫科練戦没者慰霊祭に参列して

会員　原島　淳子

平成26年5月25日（日）陸上自衛隊武器学校（茨城県稲敷郡阿見町）内で執り行われた第47回豫科練戦没者慰霊祭に、当顕彰会の代表として参列させていただきました。この慰霊祭の会場は、元土浦海軍航空隊跡地であり、海軍飛行豫科練習生の練成が行われていた場所そのものです。

慰霊祭は、今回初めてとなる海上自衛隊下総教育航空群第２０３教育航空隊によるP−３Cの慰霊飛行に続き、日の丸飛行隊による慰霊飛行の後、式典開始のアナウンスにより、式次第に沿って粛々と進められました。

慰霊祭の祭壇

主催者である、公益財団法人海原会副理事長（式典実行委員長）酒井省三氏の開式のことばに続き、陸上自衛隊施設学校音楽隊の演奏に合わせて、陸上自衛隊武器教導隊隊員による国旗掲揚が行われ、次いで、これも今回初めてとなる海上自衛隊下総航空基地隊隊員による儀仗（弔銃）が行われました。続いて、陸海自衛隊員による献花、阿見詩吟会師範による、高松宮妃殿下の御歌の奉詠、海原会理事長堺周一氏による式辞と進み、御遺族、来賓、各会代表、参列者により順次、献花が行われ、白菊一輪を霊前に捧げて拝礼いたしました。

海上自衛隊によるP−3Cの慰霊飛行

陸上自衛隊武器学校校長の来賓挨拶に続き、御遺族の言葉は、遺族代表として、日本海軍航空隊の撃墜王と言われている乙飛７期の故西澤廣義海軍中尉の甥に当たる西澤政充氏が述べられました。

（**編注**・西澤廣義海軍中尉のことに関しては、平成25年11月発行・会報『特攻』第97号30頁の「特攻コラム（その三）」を併せて参照されたい。）

奇しくも式典開始前に訪れた、豫科練出身者の遺書・遺品等が展示されている「雄翔館」内で私は、西澤中尉のパネルの前に長い間離れ難く佇んでいたこともあって、不思議な偶然に驚きました。

海上自衛隊による儀仗（弔銃）

西澤政充氏のお言葉は、戦闘中ではなく、輸送機で移動中に撃墜されて亡くなられた叔父上を始め戦死された沢山のお仲間の方々の分まで、ここに参列されている皆様には、いつまでも元気でいていただきたい、という深い想いの籠もったものでした。私もそう思います。限りある命ではありますが、皆様にはお元気で来年の式典にも参列していただきたいと切に思っております。

続いて、偲ぶ詩の朗読が行われました。これは、乙飛17期の故山岸敬祐海軍飛行兵曹長（神風特別攻撃隊第２八幡護皇隊艦爆隊、昭和20年４月12日沖縄中・北飛行場沖にて戦死）の実弟山岸修次氏が、兄上の友人から聞かれた、出撃当日の話を詩の形で綴ったもので、朗読が続くにつれ、周囲から啜り泣く声が聞こえてきました。出撃前の光景が浮かび上がり、飛び立って征く想いが胸に迫って、私の目にも涙が溢れてきました。皆様もきっと同じ想いに駆られたのではないでしょうか。

その後に続いた「若鷲の歌」の奉唱は、かつて本当の若鷲であった方々が歌う、力強い、大きな歌声の健在は、とても嬉しいものでした。

最後に奉納行事として、陸上自衛隊施設学校音楽隊の演奏、地元婦人会有志による舞踊「若鷲の歌」と続き、酒井実行委員長の閉式のことばで、式典は滞りなく終了しました。

式典終了後、会場を替えての直会と

なりました。式典の実行委員長でもある酒井海原会副理事長が謝辞を述べられ、来賓挨拶、乾杯と続き、陸上自衛隊武器学校の隊員による「常陸陣太鼓」の力強い演奏もあり、和気藹々のうちに定刻となり、来年の再会を期して閉会となりました。

海原会の会員でもある私は、ここ数年来、毎年この慰霊祭に参列させていただいております。

今回、海上自衛隊による慰霊飛行、儀仗が初めて行われたことは、の慰霊祭として、とても喜ばしいことだと思いました。また、この慰霊祭に参列させていただく中で、色々な方にお目にかかり、貴重なお話を聞かせていただけることは、とても有り難く、嬉しい一時を頂いていると思っております。

秋田からいらっしゃる方、熊本からお出でになる方等々、在天のお仲間に会いに、また、同期生会があることを楽しみに、皆様いらっしゃるそうですが、中には以前会場に飾られていた、鹿屋で撮影されたという飛行服姿の写真のパネルの前で「これは自分の同期生で、飛んで征く1週間前に撮った写真なんだ。こんな仲間がいるから、毎年杖をついてでも慰霊祭に来ているんだよ」と話してくださった方もおられました。その言葉、その想いが私の胸の中にずっと残っています。次の世代にも必ず伝えなくてはならない、この慰霊祭もずっとずっと続けてほしい。そう願わずにはいられません。

献花の様子

武器学校隊員による常陸陣太鼓

先にも述べましたが、豫科練習生の訓練の跡地に建つ「雄翔館」には、遺影・遺書・遺品等が多数展示されております。是非一度訪ねていただきたいと思います。

たった一度の人生、その人生を捧げて征った英霊の方々がいることを語り継ぎ、その御霊に手を合わせることを続けていきたいと思っております。

「希くば　さいはての地まで　昭和の御代に　童顔の豫科練という「さきがけ」ありと　後世に伝えられんことを」と残して征った豫科練習生の思いに応えるためにも。

最後に、次の句を捧げます。

若桜　みごとに咲きし　空と海

雄翔館

平成26年度第48回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

評議員　及川　昌彦

平成26年5月11日（日）、長崎県彼杵郡川棚町の「特攻殉国の碑」前において、川棚町新谷郷（総代・廣川秀雄氏）主催により執り行われた「第48回特攻殉国の碑慰霊祭」に、当顕彰会を代表して参列しましたので、以下に慰霊祭の概要と所見を報告いたします。

一　慰霊祭の概要

今回は、海上自衛隊佐世保地方総監池田徳宏海将、第22航空群司令　西成人海将補の臨席の下、御遺族、来賓、部隊員、地元民等約２００名が参列して粛々と慰霊祭が執り行われました。

そもそも、昭和19年4月、この地に川棚魚雷艇訓練所が設置され、同年8月から震洋艇の訓練が始まると共に、機関分隊、主計分隊、蛟竜・伏竜隊も設置されました。

戦後、昭和42年、慰霊碑の建立に当たり、土地の買収ほか、地元民の支援を受け、その後、慰霊碑の管理、慰霊祭の執行等も、地元の方々を中心に運営されており、悉く地元の方々の手厚い庇護を受けて執り行われています。

慰霊祭の最後に、参列者全員で「同期の桜」を斉唱し、来年もこの場所での再会を誓って解散となりました。

二　所見

慰霊祭参列のため、川棚のバスセンターで下車してタクシーを探しましたが、日曜日ということもあって、店は閉まっており、人通りもなく、途方に暮れていましたところ、旧海軍の略式戦闘帽を被った老人が自転車で疾走して来たので、慰霊祭会場を尋ねたところ、自分もこれから参列しに行くので案内しようと言われ、正に、地獄で仏の感がしました。川棚からJR大村線で小串という駅で下車し、そこから徒歩15分程で会場に到着しましたが、ご一緒させていただいた老人は、何と元特攻殉国の碑保存会会長の進藤貞雄氏でした。同氏は、和田部隊長（海兵72期）の下で、この川棚基地で訓練を受けて出陣し、台湾において待機中に終戦を迎えたという、震洋隊の勇士でした。

前事務局長の故西村金造氏の御子息である西村慎吾氏が父親の御遺志を継いで、特攻殉国資料館を完成させ、管理しておられるので、見学させていただきました。

運営全般は地元住民が担当し、遺族を中心とした理想的な慰霊祭でした。

当顕彰会会員の資質向上のための施策の紹介①

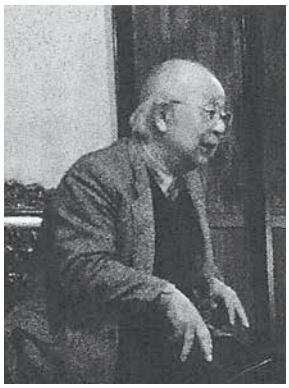
専務理事　衣笠　陽雄

当顕彰会では、平成26年度の事業推進の一環として、会員、特に慰霊・顕彰活動の中枢たる全体委員会委員の、特攻隊に関する知識、史実、精神の把握・感得等資質向上のため、新たに勉強会・研修会・講習会等を実施している。

今回、これらの内、特攻出撃の前後における隊員の心情について、生存特攻隊員との直接対話等により把握・理解するための勉強会を実施したので、その一部を紹介する（本記事は、その記録の一部であり、また、特攻隊に関する戦史、戦術・戦闘等は話題外としている）。

○元特攻隊員との対話
―特攻隊員の心情―
「中村　真氏との対話」

（平成26年4月18日実施）



中村　真氏

「編注・平成22年8月発行の会報『特攻』第84号31～53頁に、中村真氏に対する特攻インタビュー記事が掲載されているので、併せて参照されたい。」

1　質疑応答

（中村　真氏の軍隊での主要体験は、**資料2**のとおり。その主要結節における死生観・生き様についての質疑応答は、以下のとおり。）

――民間機の乗員養成学校から卒業と同時に陸軍に入隊したのは、どういう経緯ですか。

中村　逓信省の乗員養成所は卒業しましたが、2年間は航空局長官の指定する業務に従事する義務があり、その一つが軍務です。ですから6ヵ月で陸軍伍長になり、予備役下士官になれる予備下士制度を利用し、残りの1年半を航空局の嘱託として乗員養成所の助教等の仕事をして、当時松戸にあった中央乗員養成所に入り、1等操縦士、航空士の資格を取り、民間パイロットとして活動するわけですが、逓信省の乗員養成学校は、初めから軍の出先機関のようなもの（**資料1**参照）で、卒業と同時に即日召集、現役編入は当たり前のことだったのですね。ですから、卒業というのは「岐阜陸軍飛行学校」の卒業のことなのです。

――軍隊では操縦士に対して、死生観等特別の教育はありましたか。

中村　特になかったですね。軍人勅諭を毎晩暗誦させられたことはありましたが、そのようなことは、私は考えもしませんでした。

――軍隊での操縦訓練では、事故も多かったようですが、戦友・同僚が殉職された時の心境はどのようなものでしたか。

中村　殉職については、話に聞くことが多いので「惜しい人を亡くしたね」とか、一緒に飛んだ時の思い出話が仲間同士で交わされ、冥福を祈った程度のもので、士気に影響するようなことはなかったと思います。私は「俺が操縦していれば墜ちない」という自信があったので、他人の操縦では乗りたくなかった。浜松では、少尉が訓練飛行中、高圧線に引っ掛かって殉職した。これは97式重爆一型の、脚の出し入れは手動なので、操縦桿を前に倒しがちになる。それが原因ではなかったかと思われる。97重二型になり、電動式に改善された。また浜松で、97重一型の訓練中、御前崎上空3000mで、エンジンの気筒部が抜け落ち爆発した。5名搭乗していたが、太田教官の螺旋降下により無事着陸するという事故も体験しました。

――事故は部隊・隊員の士気に影響し

ますが、当時はどうだったのでしょうか。原因は究明し、対策は講じられたのですか。

中村　事故に対する説明はなかったですね。「そうであろう」程度の推測しかなかった。不明のまま訓練は続行されました。

――特攻隊員に指定された時期のことを確認したいのですが、昭和19年11月17日、捷1号作戦が発動され、立川で部隊が編成された時はまだ「菊水隊」の名前はなく、また、特別攻撃隊にも指定されていなかったわけですね。

中村　そうです。捷1号作戦の発動で、北海道、樺太等から多くの陸海軍の飛行機が立川、宇都宮、西筑波やらに集められて、纏まってフィリピンに移動しました。

――では、フィリピンで特別攻撃隊に指定された時の状況をお聞かせください。

中村　フィリピンに進出後の12月13日の夜、明日の搭乗区分が、当番により読み上げられました。それまでは、昼間の制空権は米軍が持っていて、我々が飛び上がると撃ち落とされるという状況でしたので、夜間攻撃が殆どでした。10分間隔の波状攻撃で、レイテのタクロバン飛行場が、我々第五飛行団の攻撃目標と決まっていました。その搭乗区分だろうと聞いていましたが、いつもは夜間攻撃なんだけれど、今度は昼間だね、とか編隊爆撃のようだねなどと話していました。そういうことで、13日にははっきりした命令は出ませんでしたが、どうもそうらしいと操縦士仲間での話は出ていました。

翌14日午前1時に第五飛行団の命令（次の書面のとおり）が出ました。

（注・昭和十九年十二月十四日〇一〇〇発令）
第五飛行団　命　令

敵ハ艦船八十余隻ヲ以テ「ネグロス」島「パナイ」湾付近ニ上陸ヲ企図シアリ
飛行団ハ全力ヲ以テ之ヲ攻撃ス
特別攻撃隊菊水隊ト命名セラル
飛行場出発　〇六三〇
（生田　惇著　陸軍航空特別攻撃隊史より）

この命令で、特別攻撃隊だということがはっきり決まったわけですが、富永軍司令官が以前から考えていたという「菊水隊」という名前までありました。そして当時、95戦隊がクラーク飛行場、74戦隊がデルカルメン飛行場に展開していましたので、そこで隊長からこの命令をもらったのです。ここで我々も初めて特攻隊であることを認識できたのです。

特攻隊は、19年10月に海軍の零戦が始めた攻撃方法で、我々がフィリピンに行ったのは11月19日頃で、まだ特攻隊ということについて、殆ど話もありませんでした。我々が訓練を受けていた攻撃方法は、対ソ連の戦闘で、攻撃目標は黒竜江の橋やシベリア鉄道であり、重爆撃隊の爆撃法としては精々水平爆撃又は緩降下爆撃であって、艦船攻撃で体当たりをするというような考えはありませんでした。パイロットの間では、他に攻撃手段がなくなったら敵陣に突入、自爆するという死に方が飛行機乗りとしては一番華々しい死に方である。これは教育の結果ではなく、我々の間で自然にそういうふうになっていたのです。

しかし、対艦攻撃について、12月7日、第五飛行団は、飛行第四師団長の指揮下に入り、任務は艦船攻撃に移行しました。百式重爆撃機は、およそこの任務には不適当な飛行機であって、到底その任に堪えない機種であることは百も承知であるが、そんな文句は言えない程戦況は逼迫していたのです。

――通常、特攻隊員に指定された場合は、出撃までに準備や訓練等を経る時間の余裕があると思うのですが、中村さんの場合は、午前1時に特攻隊・特攻隊員に指定され、午前6時には出撃と、殆ど心の整理や諸準備の余裕がなかったと思いますが、どのような準備をされたのですか。

中村　普通の特攻隊というのは、各戦隊から要員を募り、万朶隊とかを編成して、出撃を待ちながら体当たりの訓練を受けていたわけです。しかし我々の場合は、現場で命令を受けて特攻隊になるという即席の特攻隊員だったのです。しかも「特攻隊って何だ」という位特攻隊のことを知らなかった。艦に体当たりして沈めればいいんだろう位のことでした。だから、一般の特攻隊員として内地で編成されて出撃を待ちながら訓練を受けるという兵隊の気持ちと、我々のように、現地でいきなり夜中の1時に特攻隊の命令を受け、朝の6時には出発だと言われた特攻隊員とでは、気持ちの上で大きな差がある。我々には遺書だとかお別れの言葉とかの暇はない。それでも「永遠のゼロ」みたいに盃で乾杯をしました。乾杯後に盃を投げつけるようなことはしませんでしたが。恩賜のタバコを皆で分けて吸い、丸山特攻隊長が皆を集めて訓示をされたが、私が感心したのは隊長は体当たりをしろとは言われず、確実な方法で適艦を沈めろ、との指示でした。

内地で出来上がってきた特攻隊員と我々とでは出来方が違うんですね。何か現地で思いつきで作られたような特

攻隊でした。飛行機も特別に作られた飛行機ではなく、普通攻撃に使っている飛行機でした。装備品も無線機等を外したものもあったようですが、私の場合は、いつもは50kg爆弾を11発積むのですが、この時は牽架機で５００kgの跳飛爆弾を積みました。いつもは係の曹長が積んでくれるのですが、その曹長は面白い人で、年中面白い事を言いながら爆弾を吊ってくれていましたが、その日だけは何もしゃべらず、むっとしていました。今考えると、「この男ともこれで終わりだな」と思いながら爆弾を吊ってくれていたのではないかと思いますが、そういうこともありました。

――今の質問と重複するかも知れませんが、たった5時間後には死ぬという状況では、どのような心境でしたか。また、そのためにどんな行動をとられましたか。

中村　田舎に届くかどうか分かりませんでしたが、我々が満洲にいる時から遺骨の代わりに爪や髪の毛を「遺骨」となって帰るものとして準備していたので、特攻隊員だからといって、特にしたことは・・・「青空もあの白雲も我が命　唐紅に染めてし征かむ」の辞世の歌は、あの時書きましたが、自分の遺品の整理ですね。世話になった機付きの兵隊さんに残ったタバコを上げたりしました。主にやったのは身の回りの整理ということ位でした。

――身の回りの整理のほかに、同僚とかと何か話はしませんでしたか。また、心の動揺はありませんでしたか。

中村　動揺はなかったですね。自分は死ぬと思ってなかったんですね。どうやるか、体当たりをするにしても、最終手段として考えていた。自分の機の5人が集まった時、作戦会議を開いて「・・・あの船をやろうと決めたら、その船に向かって行って、最初私が跳飛弾で爆撃するから、前方の13・5㎜重機関銃で全弾撃ち込め、その船を飛び越してしまったら、後部の20㎜機関砲と尾部の13・5㎜重機関銃で撃て、それでもなおかつ敵が沈まないようだったら反転してぶっつけるので、その時は覚悟を決めておいてくれ」と言った。藍原少尉が「中村、小さい船をやろうや」と言っていたが、皆そのように考えていたようです。実際は、現場に行ったら状況がガラリと変わっていたので、そのようにはならなかったのですがね。

――重爆で特攻攻撃ということは信じられないことですが、重爆は最小限何名で運行可能なのですか。その時5名搭乗したというのは、何らかの理由があるのですか。

中村　通常の呑龍の定員は8名ですが、10死0生の特攻なので、95戦隊では、操縦士と機上整備士の他に、昼間の制空権は敵に握られていましたから、敵の護衛機との空中戦を想定して、後上砲と尾部の射手、前方射手に転用できる機上無線手の5名を指名したのかも知れません。74戦隊は7名になったのかな。どうせ死ぬなら特攻で死のうというヤケクソな気持ちではなかったのかと話しています。

その時、74戦隊は、もう2機しか飛べなかった。74戦隊は、デルカルメン飛行場に展開した途端にグラマンの空襲を4回受けて、28機展開したのに飛べる飛行機が2機しか残らなかったんですね。我々95戦隊は、クラーク飛行場に27機展開し、全機無事だったので74戦隊に10機補充したんです。デルカルメン飛行場には対空防御施設は何もなかったんですね。・・・（以下の質疑応答は省略）

2　中村氏の顕彰会会員への要望

――最後に、軍隊のパイロットとして、常に死と向き合い、様々な経験をされ、奇跡的に生還された経験から、特攻隊・特攻隊員の慰霊・顕彰を続ける当顕彰会会員に対する要望事項をお聞かせください。

中村　ＮＨＫテレビの番組で「ヒストリア」という歴史物の番組があり、昔の人物の伝記を芝居等を入れて紹介していました。それは歴史の大きな流れであり、その中には渦や障害もある。そういう時代に生まれ合わせたのは、その人間の宿命なんだから、そのまま受け入れるのが良いと私は思う。やたらと時代の中に嵌まり込んで、宿命に逆らうような行動は取らず、悠々と一生を送るような生き方、それもまた、人間としての一つの生き方であると思うので、皆さんも色々な宿命、運命を背負っていると思うが、これは変えられないので、然るべき運命に従って、悠々たる人生を送られるようにしていただきたいと思います。

（資料１）

（昭和62年防衛研究所戦史部員・磯辺巌氏著『陸海軍航空予備役下士官操縦者の教育』から抜粋）

・・・乗員養成所設置に際して、陸軍が航空局長官に行った民間操縦士要請の要望は、一見、予備戦力としての民間操縦士の養成にのみ目的があったように見受けられる。しかし陸軍の予備役下士官候補者の教育を見ると、課程修了者を民間航空に送り込むことによって、民間航空の発達を促進し、予備戦力を拡充すると共に、操縦士という人的要素において軍民航空の一体化

を図るというものであることが判る。陸軍が予備役下士官候補者の教育を開始した理由は、正に軍民航空を一体として発達させることにあり、乗員養成所の設置、教育に積極的な支援をしたのは、操縦教育の初期の段階から一体化を図ることにあったといえる。海軍は、陸軍が実施しているこの軍民一体化の実情を見て、乗員養成所の支援に乗り出したのである。

民間操縦士養成は、昭和17年末頃は、乗員養成所に引き続いて行われる陸海軍の教育が終了した者を、一部は民間に出し、他を陸海軍が召集するという状況であったが、戦局の悪化に伴う陸海軍の操縦者不足により、陸軍は殆どの者を、海軍は全員を、それぞれ召集した。そして19年4月には、乗員養成所を予備役軍人の養成機関とし、同年8月には仙台、京都、熊本及び都城の4地方養成所を陸軍が接収した。また、陸軍は操縦生第15期の合格者を短期現役下士官要員として、特別幹部候補生に採用した（注・中村　真氏は、第9期操縦生・昭和17年3月14日卒業）。即ち、乗員養成所は、大東亜戦争の開戦によって、その目的が民間操縦士の養成から軍操縦者の養成に移行すると共に、施設の一部を軍に接収され、受験生も軍に採られたのである（以下略）。

（資料２）

中村　真氏の軍隊での主要体験

昭16. 4	「逓信省航空局仙台地方航空機乗員養成所」で、民間パイロットを目指して訓練（17年３月卒業）
昭17. 5	予備役下士官候補者として陸軍「第二戦隊」に入隊
	※亀山→松戸単独航法（柏で燃料切れ、滑空状態でぎりぎり松戸着陸）
	浜松「第百五戦隊」（九七式重爆の訓練部隊）
	※10時間耐久飛行訓練、搭乗機のエンジン破壊で螺旋降下着陸、将校の殉職事故に遭遇
昭18. 5	満洲国鎮東「教導飛行九五戦隊」に赴任（百式重爆二型呑龍）
	※高度飛行訓練（8000m、－50℃、酸素マスクにつらら、上昇角度で水平飛行）
昭19. 2	「飛行九五戦隊」雁ノ巣、鉾田に転進、東京防空隊として太平洋の哨戒
	※1800Km洋上哨戒後の僚機の墜落・炎上・殉職事故に遭遇
昭19. 2	※帯広に転進。中千島周辺・オホーツク海周辺哨戒。船団護衛
昭19.11	比島クラーク飛行場に転進・展開
昭19.12	特別攻撃隊「菊水隊」下命・出撃。※掩護戦闘機なく、重爆のみで応戦するも撃墜され、不時着水。離脱中、比ゲリラの捕虜となる。
昭21. 4	モロタイ、ニューギニア、オーストラリアで捕虜生活。４月３日帰国

新刊図書紹介

①　清武英利著『「同期の桜」は唄わせない』

この本は、かつて「幻の特攻基地」と言われた、鹿児島県加世田（現南さつま市・合併前の加世田市・旧萬世町）の萬世飛行場の建設から同飛行場が沖縄特攻作戦において、２０１柱の特攻戦死者が出撃した陸軍最後の特攻基地となり、戦後その特攻隊員たちの慰霊碑建立と万世特攻平和祈念館の設立のため、東奔西走して特攻隊員たちの遺影や遺書、遺品等を蒐集し、私財を投じ、その後半生を捧げた特攻隊員の戦友苗村七郎氏の奮闘努力と特攻隊員やその遺族に寄せる並々ならぬ想いを綴った感動の書である。

著者の清武英利氏は、２００４年８月から２０１１年11月まで読売巨人軍の取締役（後専務取締役）・球団代表

兼編成本部長・オーナー代行を務めた有名人であるが、１９５０年、宮崎県の生まれで、立命館大学卒業後、75年に読売新聞に入社、社会部記者、中部本社社会部長、東京本社編集委員、運動部長等を歴任した経験から、退任後はジャーナリスト・作家として活躍し、多くの著書を著しているが、本書も綿密な取材を通じて苗村氏の人物像や特攻隊戦友に寄せる熱烈な想い、追悼の心を余すところなく書き表している。筆者も慰霊祭の席で、苗村氏にお会いしたことがあるが、慰霊碑建立、特攻平和祈念館建設の功労者という程度の認識しかなかったが、その人柄、戦没戦友に対する一途な想い、その行動力に対しては感服のほかない。

本書の題名となっている「同期の桜は歌わせない」というのは、「同期の桜」の歌は、特攻出撃の戦友を送る「誓いの歌」即ち「靖國神社で会おう」との約束の歌であり、また、戦没戦友への祈りの歌、葬送の歌でもある。巷でよく歌われるような送別の宴席の歌ではない。飲み屋や料亭で、この歌を歌う若者を怒鳴りつけたこともある苗村氏である。また、苗村氏の強い要請を受けて設計された万世特攻平和祈念館の建物は、正面が複葉の練習機、いわゆる赤トンホをイメージさせる2階建ての構造をしており、屋根は祈りの合掌を想わせる形をしている。そこは戦没特攻隊員達の慰霊堂であり、祈りの場であって、決して観光施設ではない、と言う苗村氏の考えに沿ったものだからである。

苗村氏は、大阪の繊維問屋のボンボンとして生まれ、昭和18年に関西大学を卒業して仙台陸軍飛行学校に入校した特別操縦見習士官（特操）1期生で、昭和20年3月、陸軍飛行第66戦隊の一員として、九九式襲撃機で萬世基地に飛来し、沖縄作戦で同基地から出撃する特攻機を掩護し、戦果を確認する直掩任務に就いた。学生時代から飛行機に憧れて日本学生航空連盟に入り、関西での主要メンバーになった。その頃からの親友が沖縄特攻で散った今田義基少尉である。今田少尉の遺書の中に、昭和20年の元旦二人で、東京都内のS中将宅を訪問した時のことが書かれていた。日本学生航空連盟が全日本一周飛行をした際の総指揮官であったS中将に二人が「特攻隊に志願しようと思います」と言ったところ、S中将は「そうか、感銘を受けたよ」と言われた後、呟くように「学鶯、学鶯と新聞には出てくるが、名簿を繰っても一人も（特攻隊には）出てこないな」と言われたという。「それに比べると、君たちの志願は尊いぞ」という趣旨の意味だったのであろうが、その言葉は純情で頑強な闘志の持ち主である今田の胸を激しく貫き、「（そう）言はれたときに、小輩は実に苦しかった。特攻の第一撃は我等学鶯でなすべきではなかったろうか。其れで初めて学連の学生航空隊の意義があるのではなからうか。閣下は此んな事を言って笑ひでにごされたが、我等学生航空隊は『はがユク』『いくじなし』と思はれて、胸中ではないて居られる事だらう。何故教へ子が出て呉れないのだらうか。此の時に小輩の如き、閣下に人一倍御心配を掛けた者が、イの一番に出る可きだのに、いまだにのうのうと余生をムサボッテ居るとは何たる恩知らずなのだらう。征け、死ね、死ぬのは今だ」と書かれていたのに衝撃を受けた、という。

また、特攻戦死した息子の父親が敗戦から1年後に、その息子に向けて認めた次のような手紙を読んで、強い感銘を受けた、という。

その息子は、大阪市出身で、天王寺師範学校（現・国立大阪教育大学）を卒業した元教員の毛利理（おさむ）少尉である。

「亡き理に告ぐ

理の尽忠報国の行為は、親に対しては、最大の孝行である。父の喜び、家の名誉之に如くものはない。父としては此の燦然たる金鵄勲章を胸に付けたおまへの勇姿を今一度見たいが、今は幽明境を異にし、如何ともすることができない。せめてもの心やりとして、おまへの霊柩に両の勲章をかざって、三回祭壇をつくって日夕生けるが如き思ひを以て対面して居るぞ…」

「理よ、よくやってくれた。

戦に臨んで敵重囲の中に於いて、死を決することは誰でも出来る。併し始めから必ず死ぬべき爆弾を以ての体当たりを決行することは、なかなか容易なことではない。真に此の道を選ばずしては、日本は救はれないと思へばこそだ。この至純至高の精神には父も全く感謝の外はない。

而して理よ、汝の此の崇高な犠牲的精神は酬ひられなかったぞ。

日本は完全に敗けた。併しこれは汝の責任ではない。戦争計画者、戦争指導者の責任であることはいふまでもない。戦争に敗れても、汝の戦死は無益とはならぬ。犬死にとはならぬ。何んとならば此の大義に殉ずる精神は永久に生きて行くべき筈だ。此の魂は敗戦日本を再建する原動力となろう。それは戦争を再び起こすのではない。平和日本の建設をしなくてはならぬ魂である」

本書に認められた数々の特攻隊員の

遺書、魂の叫び、遺族の想い、飛行場建設にまつわる秘話、特攻隊員の慰霊顕彰に関わる逸話等々、貴重な内容の著書である。是非一読をお薦めする。

（飯田正能記）

初版発行　平成25年12月19日
定　　価　本体1500円＋税
発 行 所　ワック株式会社
〒102－0076
東京都千代田区五番町4－5
五番町コスモビル
電話03－5226－7622

②　吉本貞昭著
『知られざる日本国憲法の正体』

本書は、同じく吉本貞昭著『東京裁判を批判したマッカーサー元帥の謎と真実』に続くマッカーサー研究の第二弾である。知られざる対日占領政策の舞台裏、引いて知られざる「日本国憲法」誕生の舞台裏、更には、知られざる「日本国憲法」の正体を、戦後公開された米国政府の公文書を始め、占領政策に関連する多くの著書、論文、当時の内外の新聞、報道記事を丹念に繙いて纏め上げた渾身の力作である。

そして、著者は、その結論として、「日本人が戦後、失われた自信と、誇りを取り戻すために先ずやらなければならないことは、これらの意識を改革して自らの手で日本民族の精神を基礎とする自主憲法を制定し、真の主権を回復することであると思うのである。そこから、本当の戦後が始まっていくからである。その上で、日本がこれから行くべき方向が自ずと決まってくるであろう・・・」と述べている。

本書によって、今なぜ「憲法改正」なのかが明らかにされるであろう。

是非一読をお薦めする。

外国の識者はつとに、次のように述べている。

「この憲法は、外国の勝利者によって押しつけられたものである」
―アルフレッド・C・オプラー（GHQ民生局・法制司法課長）

「戦争放棄を定めた日本国憲法第九条は、どこから見ても米国製だ。今後どうすべきかは、日本の国民と国会が判断すべき問題だ」
―マイク・マンスフィールド（駐日アメリカ大使）

「私の叔父にあたるマッカーサー元帥ですが、彼の日本占領政策は、根底から間違っておりました。どうか一日も早く、GHQの押しつけ憲法を捨てて、日本の歴史と伝統に合った憲法を制定して、昔の姿に回復して下さい」
―ダグラス・マッカーサー二世（駐日アメリカ大使）

是非一読をお薦めする。

（飯田正能記）

◇

初版発行　平成26年4月30日
定　　価　本体2100円＋税
発 行 所　株式会社ハート出版
〒171－0014
東京都豊島区池袋3－9－23
電　　話　03－3590－6607
FAX　03－3590－6078

③　丸谷元人著
『日本の南洋戦略―南太平洋で始まった　新たなる〈戦争〉の行方―』

本書の第1刷発行は平成25年7月25日であるから、最早新刊とは言えないのかもしれないが、昨年10月、筆者がある会誌に本書を紹介した時点では、本書に対する関心は余り高くなかったように思う。著者が夙に憂え、かつ、それへの数多くの対策を提言してきたところである、中国のオセアニア地域への進出に対し、我が国の政・官・財の要人が極めて無関心であり、取り分け、我が国の自存自衛のための長期的戦略に意を払おうとしなかった、その付けが、今年に入って俄かに現実化してきた。即ち、南シナ海の領有権問題に関する中国の強硬策、パプアニューギニア、ミクロネシア等への経済的進出、漁港・空港整備等への積極的な支援等によって、将来、中国軍の拠点進出の怖れが増大してきたこと、それらによって、我が国の生命線とも言えるシーレーンの維持が危険に晒されようとしている現実である。幸い、安倍晋三首相は、2012年12月の就任から1年足らずの間に、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟全10箇国を歴訪して信頼関係の構築に努め、今年も6月から7月にかけて、集団的自衛権の限定行使に関する閣議決定、安保関連法制の取組み等への理解を求めるための説明も兼ね、フィリピン、オースト

ラリア、ニュージーランド、パプアニューギニアを歴訪して各国首脳と会談し、アジアの平和・安定への協力、発展の維持に積極的に貢献するために努力することを表明した。就中、日豪同盟の深化、パプアニューギニアへの、道路や橋、防災などの基盤強化のため、今後3年間で総額200億円規模の政府開発援助（ODA）を行う等、具体的な施策を打ち出したことは評価できる。

著者の丸谷元人氏は、1974年（昭和49年）生まれの少壮気鋭のジャーナリストである。氏は学生時代オーストラリア国立大学に学び、卒業後、更に同大学院博士課程に進んだが中途退学し、オーストラリア国立戦争記念館の通訳・翻訳者を皮切りに、長年通訳・翻訳業務に従事し、この間パプアニューギニアで幾つかの現地企業を設立する等して活動するかたわら、コーディネーターとして海外大手テレビ局の番組制作にも参加し、2004年には、オーストラリア国営放送の元チーフ・プロデューサークレイグ・コリーと共同で、ニューギニア戦に関するドキュメンタリー番組「Beyond Kokoda」を制作。同作品が2008年9月、オーストラリア及びニュージーランドで一斉に放送されて大反響を呼び、2009年度のオーストラリア映画祭で、ドキュメンタリー部門最優秀作品賞を受賞した。それを書籍化したクレイグ・コリーとの共著『ココダ―遥かなる戦いの道―』（ハート出版・平成24年5月発行・定価本体3200円）は、504頁に及ぶ大著であるが、日豪両軍の多くの元兵士に取材し、スタンレー山脈のココダ街道からブナ・ゴナの死闘に至る壮絶な戦いの全てを描き尽くし、豪軍をして世界最強の抵抗と言わしめた、我が南海支隊を中核とするポートモレスビー作戦の全貌を新たな視点で綴られている感動の著作である。頭書の著書と共に是非一読をお薦めしたい。

さて、本著は、南太平洋の制覇を狙う中国の外洋戦略と、既に数年来着々と進められつつあるパプアニューギニアを始め、ブーゲンビル、フィジーなど南太平洋島嶼国への中国の著しい進出の現状に対し、長年現地に住み、そこで活動してきた著者が現地感覚で見た、日本の生命線とも言えるこれら南太平洋島嶼国に関する日本の戦略が、官民共に欠如しており、むしろ重大な認識の誤りによって、元来極めて親日的であったこれら諸国が、中国の進出を容認することにより、日本の生命線が脅かされつつあるという現状を具体的に述べている。

中国海軍が、その近代化と拡大化における戦略目標として設定した「第一列島線」及び「第二列島線」の概念は、1982年に、中国人民解放軍海軍司令官・劉華清が初めて打ち出し、1997年、同じく中国海軍司令官に就任した石雲生が打ち出した「海軍発展戦略」に引き継がれて一層強調され、しかも着々と実現しつつある。つまり①再建期（1982～2000年）の中国沿岸海域の完全なる防衛体制の整備〔既に達成済み〕②躍進期前期（2000～2015年）の第一列島線内部の制海権確保〔海上・航空自衛隊を圧迫→現在実行中〕③躍進期後期（2015～2020）の第二列島線内部の制海権確保、空母による制空権の拡大④完成期（2020～2040年）の米海軍による太平洋・インド洋の独占的支配の阻止⑤2040年以降の米海軍と対等な海軍建設、という工程である。

中国海軍が外洋進出作戦として設定し、それらの制覇を目指している第一列島線（朝鮮半島から九州・南西諸島（沖縄）・台湾・フィリピン西部・ブルネイ・マレー半島を結ぶ、黄海・東シナ海・南シナ海）及び第二列島線（伊豆諸島から小笠原・サイパン・グアム・トラック・フィリピン南部を結ぶ、西太平洋）、更には豪北からニューギニア・ボルネオ・インドネシア・フィジーその他南太平洋地域はすべて中国の軍事力、経済力の強化・発展を支える重要なルートを包含している。つまり、第一列島線は、インド洋からシンガポール沖を抜けて、南シナ海を目指す「マラッカ・シンガポール海峡ルート」を包含し、また、第二列島線は、インド洋からインドネシア、フィリピン南部を抜けて行く「ロンボク・マカッサル海峡ルート」を包含する。これらのルートは勿論、日本にとつても中東やアフリカ、欧州から各種の資源・物資を運ぶ主要な航路であり、特に日本の生命線とも言えるオイル・ロードとして、日本の経済的安定と存立には欠くことのできない戦略的に重要なチョークポイント（隘路）である。

1980年代後半以降、中国の国防予算は20年連続で二桁増を実現し、米国に次ぐ世界第2位に達しているが、

中でも特に海軍増強の動きが顕著である。周辺国は、いずれ中国海軍が南シナ海からマラッカ海峡、インド洋、ペルシャ湾に至るシーレーンを確保し、太平洋地域における政治的影響力拡大と権益支配を目指すのではと懸念しているが、この懸念は急速に現実化しつつある。特に、マラッカ海峡から南シナ海に至る石油輸送ルートは、中国海軍が２０１５年までに域内覇権の確立を目指すとした「第一列島線」の内側に位置しており、中国の過激な南方政策が周辺諸国との紛争を引き起こした場合、この海域にある海上交通路（ＳＬＯＣ）によって石油、液化天然ガス（ＬＮＧ）、液化石油ガス（ＬＰＧ）の供給を受けている日本は、大きな打撃を受けることになる。日本は、この海域の安定を「国家の生命線」の一部と認識していながら、特段の軍事的、政治的影響力を持っていない。そのため、日本の商船隊は丸腰、丸裸の状態であり、仮に中国海軍がこの海域での海上覇権を完全に確立した場合、日本は忽ち、その安定的存立を中国海軍の動向如何によって左右されることになる。最近では香港の新聞『信報』が、「仮に中国と日本が開戦した場合、中国は日本の主要な海上交通路を絶つことで、日本に砲撃を行うことなく飢え死にに追い込むことができる」と主張しており、既に2年前に中国共産党機関紙・人民日報系の『環球時報』は「今は南シナ海で武力を行使する好機だ。（中略）この好機を逃がさず、迅速に行動を取るべきだ。（中略）他国への見せしめとして、フィリピンとベトナムを先に制圧する」とし、また、アメリカに対しても「米国は現在も対テロ戦争から抜け出しておらず、中東問題も膠着しているため、南シナ海で第二の戦場を切り開く余裕は全くない。米国の如何なる強硬姿勢も虚勢だ」と主張した。正にそのような事態の現実化の怖れがある。その上、若しも中国海軍の封鎖により、南シナ海が中国の海となれば、日本はマラッカ海峡ルートからの資源調達を諦めねばならなくなるが、その場合、頼みの綱は、もう一つの航路である「ロンボク・マカッサル海峡ルート」ということになるが、そのルートの周辺地域も相当不安定になる可能性がある。その原因となりかねないのが、膨大な地下資源を埋蔵するブルネイの存在であり、その元首である国王が、「イスラミック・マラユ連邦」という、フィリピン・ミンダナオ、マレーシア・サバ州等を含む大イスラム連合を建設しようとする構想を主張しており、それに便乗したイスラム系武装集団やフィリピン共産党新人民軍などの暗躍による武力衝突が頻発する等地域の安全を脅かしており、その影には地域の膨大な資源を狙う中国が、謀略資金を投入している疑いがある。

このように、日本の石油輸送ルートの脆弱性が深刻化する中で、日本はどうすればよいか、答は二つ。その一つは当然のことながら南西諸島の防衛を強化・死守することであるが、もう一つ必ずやるべきことは、「南太平洋地域の防衛」である。日本が「マラッカ海峡ルート」を放棄しなければならない場合、次に頼るのは、「ロンボク・マカッサル海峡ルート」であるが、このルートの出口は、パプアニューギニアの西側に広がる西南太平洋地域であるため、この地域の安全はどうしても死守しなければならない。そのためにも日本は、南太平洋地域の安全保障に関与することが重要である。また若しも、この「ロンボク・マカッサル海峡ルート」にまでも重大な危機が迫った時には、最後の、緊急避難的な資源輸送ルートとして「バス海峡・南太平洋ルート」を確保しておくことが必要である。このルートは、インド洋からオーストラリアの南部を回り、メルボルン沖とタスマニア島との間のバス海峡を抜け、オーストラリア東部海岸沖を北上し、パプアニューギニア沖、ブーゲンビル島の東を通って日本を目指すルートである。遠大なルートではあるが、正に準戦時態勢下における最後のルートとなるであろう。

パプアニューギニアを始め、ソロモン諸島、フィジー、東ティモールなど南太平洋の島嶼国に対して、これまでオーストラリアが恰も宗主国のように振る舞ってきた。戦後旧連合国は、１９５１年に「太平洋安全保障条約」を締結し、この海をアメリカ、オーストラリア及びニュージーランドの3国で管理するという形を取ってきた。Ａ（オーストラリア）、ＮＺ（ニュージーランド）、ＵＳ（アメリカ）の頭文字を取って、これを「アンザス（ＡＮＺＵＳ）体制」という。独立前オーストラリアの植民地下にあった南太平洋諸国では、オーストラリアに対する反発も強く、武力衝突事件も発生し、オーストラリアの国際的地位も揺らぎ出している。それに便乗して、中国の経済的進出が著しく増大している。この地域の膨大な地下資源や漁業資源を狙って道路や工場、港湾などのインフラ整備に莫大な資本を投じ、多くの中国人労働者を送り込みつつある。植民地の解放を唱える中国の進出は、現地人のためにはならず、公害による環境破壊

と原住民の生活破壊に繋がる、植民地主義の再来にほかならない。まして、軍港その他軍事施設への転換を図る怖れが大である。日本の政府や財界、民間企業が手を拱いて中国の為すがままにしていると、日本の生命線は絶たれてしまうのではないか。一刻も早く有効な手を打つべきである。幸いに、これらの地域諸国は、戦時中日本軍によって蒔かれた文明や精神の種が僅かながら残っており、現地人には親日家が多い。それは教育のせいであろう。経済援助は勿論であるが、教育支援、技術指導の面で、真に現地の役に立つ援助をすることによって国際的な信頼を確保すべきであろう。アンザス体制に日本が加わることにより、ジャンザス（JANZUS）体制を構築し、現地諸国にも信頼される南太平洋の新たな安全保障体制を確立することも必要ではないか等、本書の中で著者は、現地感覚で見た様々な提言をしている。筆者も大いに賛同するところである。

（飯田正能記）

A5版　413頁
定　価　本体1900円
発　行　㈱ハート出版
〒171-0014
東京都豊島区池袋3-9-23
TEL 03-3590-6077

事務局からのお知らせ

一　第63回特攻平和観音年次法要の実施について

平成26年も、9月23日（月曜日・秋分の日）の午後2時から、世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が、例年のとおり、駒繋神社との神仏習合により執り行われます。詳細については、同封の「年次法要のご案内」に記載してありますので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださるようご案内申し上げます。

二　平成26年度会費納入について

今回、同封しております「郵便払込票」の会費欄に「入金済」の表示がなく、「年会費納入のお願い」が封入されている方につきましては、年会費が未納となっていますので、平成26年度年会費の納入を、よろしくお願い申し上げます。

なお、会費欄に「入金済」とゴム印で表示されている方は、本年度の年会費は既に納入済みとなっております。

特攻平和観音年次法要に参列される方は、「郵便払込票」の出席に○印をご記入の上、お布施と年会費、又はお布施のみをお払い込みください。

三　特攻ライブラリーの利用について

当顕彰会が保有する特攻関係書籍等（特攻ライブラリーと称します）が、次の要領で利用できるようになりましたから、利用してください。

1　利用対象者
当顕彰会会員の方に限定します。

2　利用日時
平日の10時から15時まで。ただし、事務局員が業務の都合等により不在の時期・時間を除きます。

3　利用の種類
ア　図書の閲覧
イ　図書の事務所外への貸出し
ウ　複写（実費を頂きます。）
エ　特攻に関する資料等の情報提供

4　事務所外への貸出し
ア　貸出図書
特攻ライブラリーの全図書を対象としますが、一部の図書は貸出不可、事務所内閲覧となります。
イ　貸出期間・貸出冊数
貸出機間は1ヵ月、1回につき2冊までとします。
ただし、貸出期間内であっても当顕彰会が必要とする場合、又は利用者が会員資格を失った場合には返却していただきます。

5　貸出し・返却の手続
ア　事務所において実施します。
イ　来所が困難な場合は、往復送料本人負担で貸し出します。

6　その他
ア　貸出図書の他人への貸出しは禁止します。
イ　貸出図書を破損、汚損又は紛失した場合は、現物、又は相当する金額で弁償していただきます。
ウ　貸出手続等の規定に違反した場合には、以後の貸出しは認められません。

7　その他
図書目録は、当顕彰会のホームページ（http://www.tokkotai.or.jp）に掲載します。
ホームページをご覧になれない方で図書目録を希望される方は、送付料金（切手92円―用紙代を含む。）を同封して、事務局宛に申し込んでください。

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成26年4月1日～6月30日）

（単位千円）

五〇　松中　義昭　一〇　矢吹　朗
一〇　小宮　崇一　七　丸井　容子

七　河野　茂義　四　福島　健一
二　倉田　邦男　二　野中　力子
二　鯨井　優直　二　佐藤　一志
二　林　佐吉　一　伴野　富夫
一　日野　有希　一　二井　重吉
一　道土井　圭　一　岸本　豊
一　川井　美保

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成26年4月1日～6月30日）

宮城県　牧野　駿
　　高野　剛
　　新里　翼
群馬県　神保　久明
埼玉県　高沢　孝
千葉県　片山幸太郎
　　鈴木　純夫
東京都　橋本　孝一
　　齋藤　文彦
　　福与　明正
　　武藤　裕志
　　村田有希子
神奈川県　占部　誠
福岡県　寺本　優子
長崎県　進藤　貞雄
鹿児島県　吉満　正広
　　小野寺弘司
　　星　亨
　　牧野　吉一
　　金原　一広
　　和田はるみ
　　渡辺　里佳
　　渡邉　有
　　望月　将地
　　吉田　晋一
　　桐野　健智

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

山形県　石沢　精三
茨城県　久貫　兼資
埼玉県　小川　晴志
千葉県　塚原　成仁
東京都　坂上　公成（26・3）
　　片野　隆司（25・6・17）
　　坂爪　力
新潟県　岐阜県　平田　義和（26・4・21）
三重県　大平　司（26・2・7）
滋賀県　羽渕　輝年
京都府　中野　玄三（26・4・21）
大阪府　高崎　啓靖
兵庫県　竹内　徹（26・2・22）
奈良県　中村　治（26・4・8）
愛媛県　水木　儀三
福岡県　大村　昴
　　牛島　正信（26・4・23）
熊本県　肱岡　正（26・5・4）
宮崎県　川野　周平

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化

昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596